

鹿児島国際大学社会福祉学会誌

ゆうかり



鹿児島国際大学「社会福祉学会」創立 40 周年記念号

第22号

鹿児島国際大学社会福祉学会編集





目 次

巻 頭 言	『ゆうかり』第22号（記念号）に寄せて	林 岳宏	1
社会福祉学科企画行事	2022年度 社会福祉学科 Mini オープンキャンパス （出前・オンライン開催）について	林 岳宏	2
ゆくひと、くるひと -さよならと、こんにちは-	新任教員の挨拶 新任教員の挨拶	齋藤 代彦 川崎 竜太	4 5
ゆうかり編集委員会企画	40年を振り返って -社会福祉学会誌の特集記事- ゆうかり学生運営委員		7
先生方からのメッセージ（40年を振り返って -追想-）			
	社会福祉学会 40周年記念に寄せて	岡田 洋一	11
	社会福祉学会誌の思い出	小窪 輝吉	13
	社会学はどうなる	佐野 正彦	15
	「社会福祉学会」創設 40周年に寄せて	田畑 洋一	17
	社会福祉学会創設 40周年に向けて	田中 安平	19
	社会福祉学科 40周年に寄せて	野田 隆峰	21
	本学社会福祉学科創立 40周年を祝す	蓑毛 良助	22
社会福祉学科イベント			
	ソーシャルワーク実習		
	障害児者分野 障害児者分野での実習を通して	政所 敬恵	24
	高齢者分野 高齢者分野での実習を通して	川崎 竜太	24
	子ども分野 子ども分野での実習を通して	竹波 希春	25
	福祉事務所分野 福祉事務所での実習を通して	川井 泰成	25
	社会福祉協議会分野 社会福祉協議会分野での実習を通して	高橋 信行	26
	医療分野 医療機関での実習を通して	森下 竜成	27
	精神保健福祉援助実習について	林 岳宏・茶屋道 拓哉	28
	介護実習	岩崎 房子	30
	教育実習	古賀 政文	32
	新入生セミナーのイベント紹介！『卒業生との対話』	永富 大輔	36
演習論文報告会コメント	「演習論文報告会」の報告	岩崎 房子	38
自主研究助成による研究報告			
	社会福祉学会における自主研究助成について	茶屋道 拓哉	39
	わが国における、精神科リエゾンチームについての研究・活動報告状況についての調査		
	井上 世成・稲光 沙羅・軍神 将太郎・末田 百華		
	横山 空・鮫島 未来・指導教員 林 岳宏		40
トピックス			
	学生を外（フィールド）に連れ出す「旅する福祉」の真骨頂 PART2		
	ときを忘れさせる島々「トカラ列島」	高橋 信行	41
	「西鹿児島ー東京」が22時間だった頃ー時間のパラドクスを想うー		
	村上 光朗		43
	鹿児島国際大学社会福祉学会会則		45
	2021年度鹿児島国際大学社会福祉学会・収支決算報告		47
ゆうかり編集室便り			48
編集後記			49

40周年おめでとう！
これからもよろしくね♪



『ゆうかり』第22号（記念号）に寄せて

社会福祉学会会長 林 岳宏

ここに、「ゆうかり」第22号（記念号）が完成しました。まずは、この「ゆうかり」を最初に手に取られるであろう、今年度の卒業生の皆さんにお祝いを述べたいと思います。ご卒業おめでとうございます。コロナ禍での皆さんの大学生活は、毎年のように様々なことが変化しました。それらに臨機応変に対応しながら、実習や演習論文、就職活動や国家試験などに取り組まれた皆さんは、本当に立派だと思います。卒業後も、様々な困難と向き合うことがあるでしょう。それでも、この数年間を思い返し、さらに前進されることを心からお祈りしております。この「ゆうかり」を見て、学生生活を振り返ることが、皆さんの前進の一助となることを祈念いたします。

さて、今回は学科創設40周年記念号となっています。1982（昭和57）年4月に、社会学部（当時）内に、産業社会学科と共に社会福祉学科が開設されました。この「ゆうかり」では、上田先生と山下先生が中心になって、委員会企画として特集ページが組まれています。これまで、学科の歩みに多大な貢献をされてきた先生方から、貴重なメッセージをいただくことができました。そのような特集ページとともにこの「ゆうかり」を読まれた際には、色々な思いが去来するのであろうと思います。その思いが、皆さんの生活の糧となるだけでなく、社会福祉学科と福祉社会学研究科の発展につながるような、新たなムーブメントの種となればと思います。

今回の「ゆうかり」は、これまで同様、社会福祉学科イベントとして、ソーシャルワーク実習、精神保健福祉援助実習、介護実習、教育実習のページも組まれています。今年度も、昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症流行下での実習となりました。特に、夏の実習は、一部では「実際に医療崩壊状態であった」と言われる非常に厳しい状況の中での実習でした。日常生活において次第に制限が解除されていく一方、現場によっては、感染対応のみならず人員不足による影響で、通常の業務ができない状態に陥っていました。大学が対面授業がほとんどである状態から、そのような現場に移っての実習は、学生の皆さんにとって精神的にかなりきつい実習となったはずです。それでも、3年生や4年生の皆さんからは、実習後に充実感で溢れたコメントを数多く聞くことができました。実習ができたこと、学生の皆さんが充実感を感じられたことは、その背景に現場の指導者の皆様の多大なご協力なしにはあり得なかったことだと思います。その中には、本学科の卒業生の指導者の方もおられたと思います。本学科の40年の歴史が、今年の実習を支えてくれたとも言えるのではないのでしょうか。その背景には、その時々で、必死に教育体制を構築してこられた当時の先生方の努力がありました。ぜひ、上述の特集ページと共に読んでいただきたいと思います。

この「ゆうかり」を読んで、この一年に多くの方々の支えがあったことに感謝しつつ、あらためて福祉を学ぶことの意味を考え直す機会となればと思います。

最後になりましたが、第22号の編集に尽力していただいた上田先生、山下先生や学生編集委員の学生の皆さん、執筆者の方々に深く感謝いたします。

2022 年度 社会福祉学科 Mini オープンキャンパス (出前・オンライン開催) について

林 岳宏

社会福祉学科では、コロナ禍前まで、学科企画行事として「一日大学生体験」を開催していました。ゆかり第 19 号では、その時の様子が岩崎先生により詳しく報告されています。一部抜粋しますと、「本企画は、大学の平常授業日に実施し、中高校生に鹿児島国際大学のキャンパスライフや社会福祉学科の授業体験、大学生との交流をととして『大学生』や『社会福祉学科』のイメージを描いてもらうこと、また、『福祉』に対する興味・関心を持ってもらうことを目的に昨年度よりスタートした学科独自の取り組みです」と紹介されています。2019 年は、高校生 38 名、保護者 8 名が参加され、企画には福祉の現場の方々も参加してくださっていました。

今年度は、昨年度に引き続き、出前・オンラインによる Mini オープンキャンパスの開催としました。当初は、以前のような対面企画を検討しました。しかし、新型コロナウイルス感染症の流行が続き、このような判断にいたりしました。福祉の現場の方々へのご協力についても、既に在学生の実習においてコロナ禍にも関わらず多大なご協力をいただいていることを踏まえ、今回もご依頼を見送りました。昨年度との違いは、高校側からのご依頼によっては、在学生の参加も検討できるようにご案内している点です。ここ数年、オープンキャンパスの方法も様変わりしていて、そこでは高校生と在学生の皆さんが接点を持てるような機会が増えています。その一方、通常の出張講義の件数が増加傾向にあります。そこでは教員のみの対応が一般的です。今回は、他のイベントとの差異化を図ることも考え、このような企画としました。詳細は、次ページのポスターをご覧ください。本原稿執筆時点では、まだ本企画の開催期間内であり、高校側からのご依頼があれば、在学生の皆さんにもご協力をいただければと思っています。

その他の内容も、模擬授業と進学相談などの構成を、高校側からのご依頼によって、フレキシブルに対応できるような構成を検討しています。模擬授業については、昨年度同様、委員の先生方をお願いすることとしました。内容としては、「生きづらさを抱える人に寄り添う ―ソーシャルワーカーの可能性・フィールド・キャリア―」(茶屋道拓哉先生)、「心理学について知ろう」(永富大輔先生)、「私たちの生活と社会保障」(山下利恵子先生)、「こころの病気とその対応の実際」(林) の 4 テーマを準備しました。進学相談では、大学全体の様子を紹介し、その後には国家試験対策、就職先などの質問に対し、各先生方から説明を行う予定です。

申込期間は 12 月から 2 月末日までとし、より多くの高校生に参加していただけるよう、来年 2 月まで引き続き案内を行う予定です。

今後、感染状況によって社会がどのように変化していくか、まだまだわかりません。そのような中で進路を考える高校生の皆さんは、私達の想像が及ばない大変さを抱えることが考えられます。福祉に少しでも興味を持つ高校生の皆さんに、本学科は様々な形で情報を発信していく必要があります。今後も、開催方法を多面的に検討していきたいと思います。

最後になりましたが、今回の Mini オープンキャンパス開催にあたり、広報面などご協力いただいた入試・広報課の皆様や、担当の学科の先生方に深く感謝申し上げます。



学びに、熱を。

社会福祉学科 Mini オープンキャンパス 出前・オンライン 開催

コロナ禍でも動き続ける福祉。

＜開催日＞ 12月1日(木)～2月28日(火)における希望日
＜お申し込み方法＞ 裏面の申込書からお申し込みください。



スケジュールの例 1コマ分で実施する場合

例 ①	大学・学科紹介 10分	模擬授業 30分	進学相談 10分
例 ②	大学・学科紹介 10分	模擬授業 25分	在校生Q&A 15分



知を学び、地に活かす。

鹿児島国際大学

鹿児島国際大学 福祉社会学部 社会福祉学科
〒891-0197 鹿児島市坂之上8-34-1
TEL 099-2611-3211 (代表) <https://www.iuk.ac.jp>
Mail shafuku@ofc.iuk.ac.jp

新任教員の挨拶

齋藤 代彦

こんにちは！

齋藤代彦（さいとう しろひこ）です。わたしは、介護福祉士としての実務経験5年に基づき、2001年4月より、介護福祉士養成課程を設置する千葉市にある短期大学で11年、名古屋市にある専門学校で3年、岐阜県にある他大学で7年、専任教員として勤務してから、2022年4月に本学に着任しました。西暦の下一桁1年目の年度から教歴をスタートしましたので、西暦と共に22年目の年度となります。今年度に満64歳となりました。人生には限りがありますが、限りない可能性に満ちています。あなたも、それを大切にして行くことができます。他者と社会に自らの職務やVolunteerを通して役だって行くことができます。とりわけ、介護福祉のかかわりを必要とし、そのかかわりを受け入れてくださる一人ひとりの他者の幸せな生き方への支援に従事する専門職は、その職務を通して、ご本人をはじめとして誰もが安心して暮らし続けることのできる社会の発展に寄与していくことができます。介護福祉士は、介護福祉サービスを利用してくださる一人ひとりの方とのかかわりを軸として、その掛け替えのない人生を尊び、ご本人を主体として社会との豊かなつながりをプラス思考して生かしていく介護福祉の専門職です。介護福祉の実践は、ご本人にとっての人生の生き方に関する全容とのかかわりを通して、その支援にたずさわる者の人生をもこころ豊かにしてくれます。そう言った意味から介護福祉士は、ご本人や社会の人々の幸せのおすそ分けをいただくことのできる専門職です。支援を必要としている他者の人生の生き方と共にあり、その一人ひとりにとっての安らぎと幸せを感じ取り、我が喜びとできる人に適し

た職業です。なお、齋藤研究室では、人生の生き方への信念とのかかわりの在り方をライフワークにしてきています。介護福祉の実践はいかにあるべきかについてなど、介護福祉についてご関心を持たれましたら、どうぞ、ご遠慮なく齋藤研究室までおいで下さい。



新任教員の挨拶

川崎 竜太

2022年4月に、鹿児島国際大学に着任しました、川崎竜太です。本学に着任する前は、福岡県、広島県の大学で勤務しておりました。直近の勤務先は、広島国際大学（広島県東広島市）で、社会福祉士養成に従事しておりました。私は、鹿児島市の出身で、本学の卒業生です。この度、ご縁をいただき、母校で専門職養成に携わることができることになりました。大変光栄なことであり、感謝しております。



学部在籍時から研究や教育に関心はありましたが、学部卒業時点で就職しない自分をイメージできなかったため、高齢者施設で働くことを選択しました。短い期間でしたが、施設等で働いた経験は大きな財産となっております。その後、恩師である田畑洋一教授の勧めもあり、大学院に進学して研究者の道を志すことになりました。大学院（修士課程）では、高齢者の所得保障について研究しました。大学院修了時には、鹿児島県内で働くことを考えていましたが、田畑先生から、「福岡の大学で働かないか？」と言われました。慎重な性格のため、あまり冒険をしないのですが、田畑先生から「鹿児島を出ないと始まらない」という言葉をいただき、鹿児島を出て2009年から大学教員としての第一歩を歩み始めました。旅行で県外に行くことはあっても、鹿児島を出て働くことは想像もしていませんでした。新生活に戸惑いながらも、初めて授業したことを今でも覚えています。

福岡県で7年間を過ごし、社会福祉士養成に従事する中で、教員としての基礎を学び、様々な出会いに恵まれました。福岡県で働いている間に、本学大学院（博士課程）に進み、仕事と並行しながら大学院（博士課程）を修了することができました。移動距離もあり、仕事と両立するには多くの負担がありましたが、更なる飛躍につながったと思います。他にも、専門学校の通信課程で、精神保健福祉士を取得しました。学生に知られないように、遠くの実習先を選んだりする苦労がありました。その後、広島県で働くことになり、広島県では6年間を過ごすことになりました。広島では、大学外の出会いに恵まれました。様々な場面で活躍できる人材を輩出するために、学外との連携強化を目的として企業訪問等を積極的行いました。学生からは、「先生、何の仕事をしているのですか？」と疑問を持たれたりしましたが、広い視野を持った人材育成を目指した取り組みのために、ゼミ生と一緒に新しいことにチャレンジしたことは良い思い出です。私のゼミの方針は、「目的意識をもって、何事も楽しく取り組む」ことです。学生生活は思っている以上に早く過ぎていきます。アルバイトやサークルなど楽しいことに出会えると思いますが、卒業後のビジョンを明確にして、無理なく準備を進めることが大切だと考えています。

最後になりますが、今年度から、本学で働き、専門職養成に従事することができることをとても誇りに思っています。本学のシステムに不慣れなことがまだまだありますが、少しずつ慣れていき、学生の皆さんが有意義な学生生活を送れるようにサポートしていこうと思います。どうぞ、よろしくお願いいたします。



－ 40 年を振り返って－

社会福祉学会誌の特集記事を読んだ感想

－2002 年～ 2022 年－

社会福祉学会誌『ゆうかり』の発刊から 20 年になります。今回は『ゆうかり』の創刊号から第 21 号のうち先輩方が寄稿した特集記事を読んだ在学生の感想の一部をご紹介します。

『社会福祉学会に期待すること』 創刊号（2002 年）

社会人編入で入学した盛山さんの大学への想いが語られている。学生時代には時間の余裕があることなど、私とは違った目線で見えていたので興味が出た。コロナ禍であるため、講演会や講習会などで、実際に働いている人の話を聞く機会は少なくなっている現状があり、今の時代にこそこうした企画が必要ではないかと感じた。

（摺木 太一）

『鹿児島国際大学への想い』 第 4 号（2005 年）

戸口田先生の大学への想いがとても伝わってきました。建物が良くなり学生の人数が増えたとしても、学生気質の変化によっては学生と先生との距離が遠くなることもあります。戸口田先生はこのことを指摘されています。自分の現在はどうなのかと反省させられました。

（宮地 浩志）

『社会福祉の行う成年後見業務の役割に関する研究 ～生活支援のネットワークの形成～』

第 7 号（2008 年）

成年後見人として働く上で、ストレスを感じることはあるが、一方でやりがいもあり楽しみもあるということに驚きました。実際に仕事をしている方にインタビューすることで、インターネットでは知り得ないリアルな意見も知ることが出来たのではないかと思います。

（重村 美帆）

『社会福祉士国家資格取得に思うこと』 第 9 号（2010 年）

この論文を読み、社会福祉士国家資格取得の必要性を感じることができた。卒業して働いだと国家試験の勉強をすることは難しくなり、2 回目以降の試験は自分自身の合格率が下がってくる。そのため、1 回目で合格することの大切さを知ることができた。シンポジウムをきっかけに国家資格に挑戦する勇気にとっても感銘を受け、国家試験だけでなく、社会に出てから諦めない心が大切になると考えた。

（森下 竜成）

『“自分を振り返る”ことで見えてくるもの』 第 11 号（2012 年）

自分を振り返ることはあまりしたことは無かった。しかし、自分の過去を知ることで自分の未来をつくる価値観の軸を明確にできると考えた。この論文にも書いてある通り、過去の自分の知見を知ることによって成功と失敗を繰り返しながら自分を磨いていくことができ、将来自分に自信を持つことが出来るということを学んだ。また、私も教職を取ることを目指してい

るため、文中にあった「かきくけこ」の基本を身に付けていきたいと思った。（森下 竜成）

『恥でもないことを恥だと思えることが恥だよ』 第 12 号（2013 年）

この記事の内容はハンセン病のことについて書かれています。とても印象深いもので、私も大学生になるまではハンセン病についてあまり知りませんでした。しかし、講義で習ったこともあり、とても興味を持ちました。昔行われていたハンセン病に対する国の政策はとても酷いものだと感じました。だからこそ、多くの人に知ってもらうことが必要だと感じました。その他にいじめについても同じ差別だと考えることができる前野さんを見習って様々な視点から物事をとらえられる人になりたいと感じました。（川崎 千尋）

『あなたの知らない、車いすマラソンの世界』 第 13 号（2014 年）

坂元さんは講義でお会いしたこともあり選ばせていただいたが、読んでみるとやはりカッコいいなと思いました。青春真っ只中、事故に遭い脊髄損傷で下肢機能全廃になってしまったが自分を活かそうと沢山のスポーツを始めて今では車いすマラソン選手として活躍している姿がとてもカッコよく、強い意志を見習いたいと感じることができました。（岩下 美輝）

『社会福祉ってなんだろう』 第 15 号（2016 年）

私は、将来、社会福祉士と介護福祉士の資格を取得しようと考えている。また、在学中に福祉住環境コーディネーター2級を習得しようと日々勉強に務めており、このエッセイを書いた前山さんも同じ資格を取得しようといっていたため大変興味があった。文を読み進めると実習での経験から得た学びが書かれていた。その内容はとても共感することが多く、今後の活動に役立つことが多かったので頭に置きながら活動していきたいと思う。

（川崎 千尋）

『熊本地震災害地ボランティア ～子どもたちへのボランティア～』 第 16 号（2017 年）

熊本地震のニュースを見た衝撃は今でも忘れられません。自分が住んでいる鹿児島でも結構な揺れを感じたので、熊本の人たちはもっと激しい恐怖を感じたのではないかと思いますと胸が痛みました。被災地でのボランティア活動を通して先輩方が子どもたちのために遊びを考え、1人でも多くの子どもが楽しめるよう奮闘する姿がとても素敵で、出来ることならば自分も参加してみたいと思いました。（岩下 美輝）

『「一日大学生体験」同行レポート』 第 18 号（2019 年）

一日大学生体験は、実際にプレゼンテーションやグループワークに参加することで、大学生活の雰囲気を知るだけでなく、大学生と直接コミュニケーションを取る機会を作ることが出来ます。さらに、社会福祉に関する学びをより深めることが出来るため、中学生・高校生にとって、大変良い経験になったのではないかと思います。（重村 美帆）

『「大学猫」の考現学』 第 18 号（2019 年）

人懐っこい「大学猫」は、学生たちに癒しだけではなく幸運も与えるそうで資格試験前に「大学猫」を撫でて試験に向かう学生も多いそうです。また「大学猫」のせいにしなくて試験が終わった後で「大学猫」を撫でる学生もいるそうです。「大学猫」は癒しや幸運だったり勇気も与えているそうです。しかし猫に対していいイメージだけではなく猫を大切にしている団体も必要なのかもしれないです。（西川路 優斗）

『花いっぱいになりました！！』 第21号（2022年）

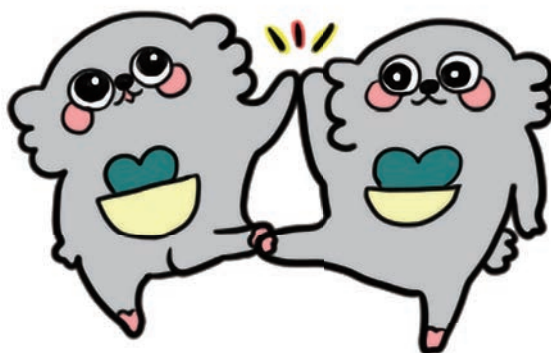
コロナで活動制限が続くなか、5号館の花壇の手入れを、ゆうかり編集委員会が中心になって行った記録です。最初は草むしりからのスタートです。雑草をそのままにしておく土の養分や水分が奪われるだけでなく、育てる花に十分な日光が当たらなかったり病原菌の温床になったりするからです。土には図書館の裏で作っている腐葉土を交ぜます。腐葉土には通気性や保肥性、保水性があるだけでなく、有機物を分解する微生物が多く含まれ、土壌改善に有用です。自然あふれる鹿児島国際大学のキャンパスを沢山の花で彩ることで、華やかさいっぱいの学校にしてゆきたいものです。

（西川路 優斗）

社会福祉学会誌の特集記事一覧

発行年度	号	テーマ	筆者名
2002	創刊号	社会福祉学会に期待すること	盛山 美咲 和佐 麻古
2005	4	鹿児島国際大学への想い	戸口田三千尋
2006	5	西之表市地域福祉実態調査の実践と課題	小川佐斗美
2006	5	日置市東市来町における「ふれあいいきいきサロン」活動について	中原 浩平 中村 将人
2008	7	社会福祉の行う成年後見業務の役割に関する研究 ～生活支援のネットワークの形成～	岡元 弘子
2010	9	社会福祉士国家資格取得に思うこと	中野 裕一
2012	11	“自分を振り返る”ことで見えてくるもの	池田 明広
2013	12	恥でもないことを恥だと思ふことが恥だよ	前野 芽
2014	13	あなたの知らない、車いすマラソンの世界	坂本 智香
2015	14	社会福祉用語・人物 300 選	竹迫 美香 紙屋 奈央
2016	15	社会福祉ってなんだろう	前山 悟
2017	16	熊本地震 災害地ボランティア ～子供たちへのボランティア～	濱田 凌
2018	17	施設見学	池濱 友輝 原田 歩美 平田 智之 西 星哉 磯川健太郎 大久保杏香 武田 拓土 吉田美南海 弓場 悠太
2019	18	「大学猫」の考現学	有園 菜央 佐々木晶
2019	18	「一日大学生体験」同行レポート	上村 義歩
2020	19	迷走的突発レポート	有園 菜央 佐々木晶
2020	19	箱根駅伝グラフィティ	一氏 未奈
2020	19	【書評】有川ひろ『レインツリーの国』	草野 春香
2021	20	匠にインタビュー	上村 燿 小野 美幸 桑鶴 海良 下津 美月 三宅 希美 上村 麗奈 田畑 夏美 榊 彩人
2021	20	綿の花を育ててみました！	三宅 希美 上村 麗奈
2021	20	地域猫をご存じですか？	榊 彩人 田畑 夏美
2022	21	花いっぱいになりました！！	三浦 仁太 飯田 珠莉 佐藤 遼河 榎園 琉斗 野田 葵心

社会福祉と
ポポラスの未来は
無限大 ∞



社会福祉学会 40 周年記念に寄せて



九州ルーテル学院大学 岡田 洋一

社会福祉学会 40 周年記念おめでとうございます。この記念誌に私の文章を載せて頂くことを光栄に思います。私は 2003 年に熊本の社会福祉専門学校から鹿児島国際大学に 49 歳で赴任しました。当時は学生数が 5,000 人近くいたと思います。大学は活気に満ちていました。当時の思い出として深く残っているのは、野田先生と赤星先生（私の前任者）が精神保健福祉士コースの学生たちと歓迎会をして頂いたことです。そこには、茶屋道さん（現在、准教授）もいたように思います。まだ、3 月の終わりだったように記憶しています。4 月には城山観光ホテルで大学の歓迎会も催されました。私はひどく緊張していましたが多くの先生方が気楽に声をかけて下さり、励まして頂きました。同期の先生は菊池先生、岩井先生でした。2 人とも新進気鋭の若手研究家というイメージでしたがそれはその後の彼らの活躍を観れば間違っていなかったわけです。その後、大学生活の中で 2 人からは多くの支援を受けることになりました。また、その翌年かあるいは翌々年に入職された国際文化学部の大西先生とも機会があれば語り合うことになりました。勿論、社会福祉学科の先生方にも多くのご指導と励ましを頂きました。多分、私が大学教員としてなんとか 18 年間も過ごすことができたのは諸先生のおかげであると心より感謝しているところです。ただ、残念なことに、個人的も親しくして頂いた、崎原先生、鱒渕先生、山下先生（児童学科）が逝去されたことは私の心に大きな空洞を作り出しました。私は入職してすぐに山下先生（当時学生部長だった）から声をかけられ学科の推薦で学生相談員を行っていました。この仕事は退職するまで続けることになりました。経済的問題や親子関係、メンタルヘルスに課題を抱えた学生などと時間を共にしたことを今でも思い出します。夜中に精神科病院受診に同行した学生や、ストーリー的な被害を受けていた学生と一緒に警察に相談にいくなど様々なことが蘇ります。今は幸せにしているのだろうかなどと思ひ出すことがしばしばあります。

教育については精神保健福祉士になるための実習が印象深いものとなっています。毎年、10 名～20 名前後の学生が実習に参加していました。現場の指導者や病院スタッフとうまくいかない学生たちと、夜遅くまでファミリーレストランで彼らの話を聞いていました。ほとんどの学生が無事に実習を終了することができたことを嬉しく思っています。勿論、様々な都合で実習を終わることができなかった学生も数名います。今はどんな人生を送っているのか気になるところです。同時に 300 名近い精神保健福祉士を送り出したことは私の誇りであり、同時に野田先生、林先生、茶屋道先生、実習助手、実習センターそして学科の先生

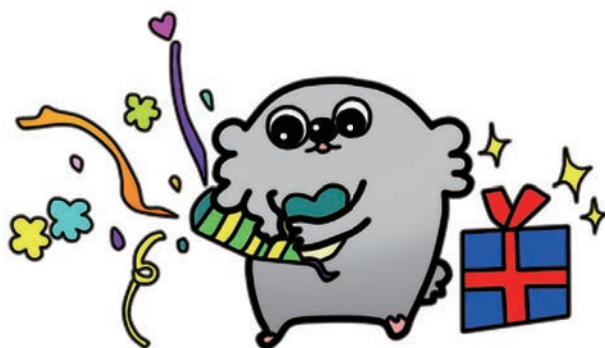
方のおかげだと感謝しているところです。

地域活動では精神保健福祉や人権、アディクションに関わる行政の委員会、保護観察所における薬物依存症者や家族支援などに関わってきました。ここでも精神科医療に携わる医師や保健師、それから弁護士、司法書士などと個人的にも親しくなり勉強会を立ち上げるなどして意義のある時間を共有することとなりました。これらの人たちとのネットワークが鹿児島県の精神医療保健福祉の前進の一要因となっていると今でも考えているところです。さらに、鹿児島市の中学生の死亡事案に関する調査委員会に入り3年間もの時間をかけて報告書を作成したこともかけがえのない体験となりました。

研究の方ではあまり成果をあげることはできませんでしたがアディクションについて鹿児島純心大学、志学館大学の先生と一緒に研究会を開催し科研費を取り（私は共同研究者）何本かの論文を書くことができました。また、高橋先生から清水基金の援助を頂き、精神保健福祉士の役割に関する論文を鹿児島県精神保健福祉士協会と共同で書くことができたことも大事な経験となりました。

あつというまの18年間でした。人生の後半を走り抜けるように生活してきました。鹿児島の地で多くの人々と出会い、助けられ、学んできました。不十分なところだらけですが私としてはベストを尽くしたと思っています。まだ、ここに書ききれない多くの出来事があり走馬灯のように頭に浮かんでいますが紙面も尽きてきました。

鹿児島国際大学でかかわった全てのみなさんが困難な人生と付き合いながらも希望を持ちつつ未来を切り拓いていくことを願っています。私も残り少ない人生を私なりに意味のある人生として生きていきたいと考えています。皆さん方とところよりの連帯を込めて。



社会福祉学会誌の思い出

小窪 輝吉

先日、大学の総務課からレターパックを預かっているという連絡をもらい、総務課があった1号館にうっかり足を向けてしまいました。すでに1号館は閉鎖になっていて、建物の周りには草が伸び、溝には落ち葉がたまり、無人の建物特有の寂しい静けさを感じました。1号館をぐるりと回り4号館にある総務課に行くとそこには顔なじみの職員の方々がいて2年前に退職した私を暖かく応対してくれました。

私が本学に赴任したのは社会学部が発足した1982年です。その前年の暮れに本学を訪問させてもらい、最初に案内された建物が1号館でした。初めて訪れた私の緊張感のせいもあったと思いますが、新学部発足を前に活気に満ちた印象を受けました。学内を案内してもらい、フィールドハウスの大きさに驚き、こぢんまりとした図書館（現、ユーカリ会館）に好印象を持ち、突貫工事中の5号館の3月完成を心配したのを覚えています。4号館のところには池と木造の大講義室がありました。その頃は下駄を履いた学生もいて定期試験中の静かな大講義室に下駄の音がして教員から注意される場面もありました。7号館のところには大きな食堂がありました。図書館のところにはボクシング部と少林寺拳法部が入る平屋の建物があり、放課後になると5号館から部活の様子が見え、のどかな雰囲気が残っていました。のどかといえば、当時、放課後に教員同士でスポーツをする姿もありました。また、職員と教員でソフトボールの試合をすることもありました。ひと声かけるとソフトボールに必要な教職員をそろえることができたのです。あの頃は、他学部の教員の顔も普段接しない部署の職員の顔もほぼ全員知っていました。

40年の変化はずいぶんと大きかったと思います。学部の名前も社会学部から福祉社会学部になり、発足当初の産業社会学科が現代社会学科へと名前を変えました。その後、児童学科が加わり3学科体制になりましたが、現在は社会福祉学科と児童学科の2学科体制になっています。この間変わらなかったのは社会福祉学科だけということになります。

社会福祉学会誌の記憶をたどってみます。1982年に社会福祉学科と産業社会学科からなる社会学部が誕生し、そこに学生と教員で構成する学部学会「社会学会」が発足しました。「社会学会」では学会活動の広報誌的役割を果たすための会報誌として「ゆうかり」を、機関誌として「YAM」を創刊しました。「ゆうかり」は、第1号が1983年10月に発刊され、手元に残る第23号が1997年3月に発刊されています。内容は学会活動、助成研究報告、講演会報告、新任教員の紹介、随筆など多様です。当初は10ページ前後の2つ折りになったニュースレターのような体裁で、白黒印刷でした。2001年に福祉社会学部に改組した際、学部学会から学科単位の学会に変わり、社会福祉学会では「ゆうかり」の名前を継承し第1号を発刊しました。

ところで、途絶えた機関誌「YAM」の話です。第1号創刊が1985年9月で、手元に残る第11号が1997年3月に発刊されています。年1回の発行で、当初は学生の独自企画が多くを占め、数十ページの中身の濃い冊子形式でカラー刷りでした。私の記憶では「YAM」は学生が中心になって作っていたと思います。学生の常と言っては失礼ですが、発行が遅れ遅れになるということで、当時無役の私に発行の進行担当が舞い込んできました。第1号が出た半年後の1986年3月までに第2号を発刊するということでした。当時の学生の紙面づくりは、トレース用紙1枚1枚に完成ページに近い形で枠取りと文字を手書きで書くやり方でした。ワープロも普及していない時代でしたので、最後の文字がきちんと埋まるように何回も書き直していました。印刷会社の方から、「原稿と文字サイズとレイアウトの指示をいただければこちらで作るので、そちらの方が早いんですけど…」と言われながらも、学生は「自分たちの手で誌面を作るんだ」とこだわりを見せていました。YAMはYoung Association Magazineの頭文字を取ってつけた名前前で、サツマイモを指すこともあるyamの意味を含むということでした。ある学生は表紙に載せるサツマイモの絵を描く担当で、それだけの作業に没頭していました。私が関わったのはあの号限りのことでしたが、年末から3月初旬まで学生が私の研究室に缶詰めになってYAMの紙面作りをしたのが懐かしい思い出です。学生の学会への取り組みがはんなりなかったころの話です。



社会学はどうなる

佐野 正彦

私は、1994（平成6）年4月に「社会病理論」担当の「助教授」（現准教授相当）として新規採用が決まり、「鹿児島経済大学社会学部産業社会学科」に赴任しました。その後2000年を越え、大学名は「鹿児島国際大学」に変わり、学部名も「福祉社会学部」に変わり、おまけに学科名も「現代社会学科」に変わりました。一教員としては、こんなに名前が変わってしまい、何か良いことがあるのかと思いましたが、卒業生はどんなふうに感じているのだろうかと当時慮りました。……この学科も、たった一人残っていた学生（休学中）が2018年の夏季に「退学」の手続きを採り、10月の教授会で正式にこの「退学」が承認されたことにより、とうとう2018年度（2019年3月）をもって消滅することになったのでした。その後私は社会福祉学科に完全に移籍し今日に至っております。たぶんこんな「産業社会学科→現代社会学科→学科消滅」の流れなどどうでもいいことで気にも留められていないこととは思いますが、私にはなかなかの経験でしたので、この紙面を借りて紹介させていただきしました。

与えられた紙幅が少し残っておりますので、「社会学の視角」みたいなことを話させていただけようと思います。少々捻破りかも知れませんが、悪しからずどうかお許しください。“暴走老人”の我が儘として大目に見てください。

さて、人間は〈社会〉に生み落とされ〈他者〉とともに生きることによって、社会的存在としての〈人間〉になることができます。言い換えれば、〈他者〉との相互行為のなかで〈人間〉としての能力が発揮できるようになります。たとえ〈人間〉としての能力が生まれつき身体に内属しているとしても、その能力を開花・発揮させるには〈社会〉からの刺激としての〈他者〉が必要だと言っても同じことです。ここに社会学という学問・視角の根源があります〔と信じています〕。〈人間〉の遺伝子のなかに所与の〈自然〉＝〈環境〉＝〈社会〉に自動的に対応できる〈本能〉のような代物^{しろもの}が内在しているのならば、「生まれた」だけで基本的なことは何でもできるようになる筈ですが、実は〈私たち〉はそれだけでは何も出来ません。したがって、無人島に赤ちゃんが遺棄されれば、赤ちゃんは自動的に対応することは出来ずにメドゥーサの首に睨まれた如く、死を受け入れるほかありません。〈人間〉以外の種は個体維持のための摂食行動や種の維持・保存のための生殖行動が遺伝子のなかに〈本能〉としてプログラミングされているのが常です。こうした言い方が首肯されるならば、〈人間〉には〈本能〉がない、あるいは上手く作用しない不十分な〈本能の残り滓^{かす}〉みたいなものしか実在しないと言えます。

となると、様々な人間行動を〈本能〉から説明するやり方には問題や限界があることが分かります。例えば、女性ならば誰もが〈母性本能〉を持っているのは当たり前だ、というも

のがあります。もしも小さな子どもを育てている若き「女性」の母親が育児などしたくないし、子どもなど少しも可愛くなく嫌いだとしたら、どうなるでしょうか。彼女は〈母性本能〉の欠如した異常な存在＝女性に貶められるのではないのでしょうか。究極的には“女”じゃないといったレッテル貼りが当然になされてしまうかも知れません。“育児”に悩む若いお母さんたちの呻吟する姿の背後には、彼女らを形容するこのような〈常識〉・物言い・イデオロギーがあります。

ところで、育児は本来いろんな人々の「協働」によって行われるものだと考えられるならば、一人で育児に悩む若い母親を救える糸口があるように思います。ホモ・サピエンスとチンパンジーなどのサルグループが系統分化した7～800万年前以降、この分化した二つのグループの決定的な違いは、ホモ・サピエンスのグループが著しく多産になったということです。つまり、ホモ・サピエンスは産児制限しなければ10人や15人の子持ちが当たり前になったということです。それゆえ、そもそも一人のお母さんだけでは1～2年毎にポコポコ生まれてくる赤ちゃんの面倒を見ることはできない訳です。つまり、人類の育児はそもそもその初めから「協働」が必然だったと考えられる訳です。「立っている者は親でも使え」です。今の時代は少なく生んだ子どもを核家族のなかで育てるのが当たり前だから、こうしたことが見えづらくなっているだけです。〈母性本能〉は〈母性イデオロギー〉に過ぎないのです。こうして育児はみんなでやるのが当たり前の事柄だったことが理解できる訳です。

社会学は、自明性という暗幕を振り払い、これまで見えにくくなっていた実態を詳らかにすることを可能にしてくれる眼鏡なのです。しかし、鹿児島国際大学における社会学は終焉を迎えつつあるのかも知れない。

(2022.10.09 脱稿)



「社会福祉学会」創設 40 周年に寄せて

田畑 洋一

1982 年 4 月、産業社会学科と社会福祉学科の二学科から成る社会学部が新設され、それを契機に同年の 10 月に学部の教員と学生の全員を会員とする鹿児島経済大学社会学会が創設され、各クラス・ゼミから学会学生員を選出し、学会活動がスタートした。社会学会は、学生と教員が対等な立場に立ちながら、会員相互の学問的交流と学生の主体的活動を推進するもので、その主な事業としては、会報『ゆうかり』ならびに機関誌『YAM』の発行、学会手帳の発行、学生の自主的研究活動への助成、新入生歓迎会、卒業パーティ、講演会など多岐にわたっていた。

当時は一学部一学会であったが、2001 年 4 月には、産業社会学科が現代社会学科に改組され、新たに児童学科が設置され、学部が現代社会学科、社会福祉学科、児童学科の三学科体制になったことにより、学部名称も福祉社会学部になった。以後、学部学会は学科に基礎を置く三学会に分離・再編された。ここに鹿児島国際大学社会福祉学会は誕生したことになる。その歴史は、前身の社会学会の時代を加えれば、2022 年で実に 40 年の長きにわたる。

2002 年 11 月には学部創設 20 周年を記念して「子どもの今と未来」と題し、三学会共催のシンポジウムが開催され、活発な議論が交わされた。以後、各学会は各学科の特徴を活かしながら、講演会やシンポジウムの開催のみならず、多彩な活動を行ってきた。社会福祉学会においても、講演会・研究発表等の学びを企画・実施し、併せて機関誌『ゆうかり』を毎年発行してきた。なお、現在の学部学会は社会福祉学会と児童学会の二学会である。

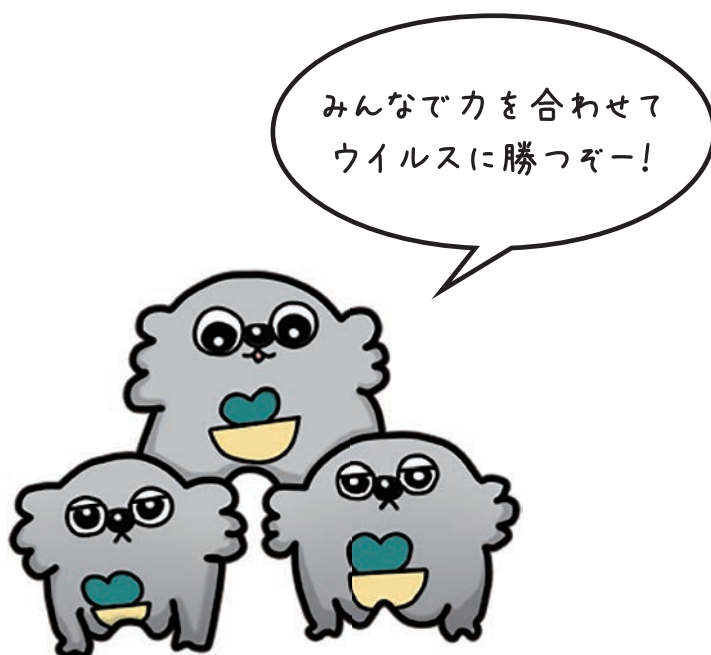
社会福祉学会は学生・教員の協働によって企画・運営されてきたが、なかでも 2016 年 8 月、54 歳の若さで急逝された崎原秀樹先生の意欲的な取組みを忘れることができない。先生は学生に「元気かい」「原稿を書いてみないか」などと声をかけられ、学生の学会参加を呼びかけ、学会の活性化にご尽力された。毎年行われる新入生歓迎会、総会、講演会、研究助成成果報告会、卒業パーティ、そして機関誌『ゆうかり』の発行などに精力的に関わってこられた。とくに 2015 年学会発行の『人生楽しくするもしないも自分次第』(ラグーナ出版)は、先生の企画編集によるもの、そこには学会の成長の記録や学生の生の声が綴られている。例えば、①オープンキャンパス企画体験記、②自主研究助成成果報告、③合格体験記一何をもどのように取り組んだか、④社会に出てからも、遊び心を忘れずに、等々、示唆に富む内容になっている。編集者としての崎原先生から学生への熱いメッセージも収められているので、学生の皆さんは今一度、手にとっていただきたい。

最後に社会学会から社会福祉学会への再編に係わった古参教員として皆さんにお願いをしておきたい。それは社会福祉学会の活性化についてである。筆者は様々な意見がある中で、学部長として三学会に再編した当事者であったので、かねてより皆さんの自主的参加により

社会福祉学会をさらに活性化させ、その存在意義を高めて欲しいと思ってきた。学会に参加することが本学会の目的の「会員相互の交流を促進する」ことになり、それが自らを磨き高めることにもなる。これまではコロナ禍で活動が制限されていたのでやむを得ないことであったが、with コロナの今は、感染予防を徹底しながら、可能な活動を進めていって欲しい。学会活動に向けては組織的連携の強化により、これまで以上に活動を強化・拡充すれば、その活動そのものが誇り得る実績となるばかりか、「開かれた大学」「地域に貢献する大学」という本学の理念にも合致する。そういう意味で、社会福祉学会が時代や社会の要請に応え、主体的にその事業や活動に取り組んで欲しいと思う。今は一昔前とは異なり、学会への無関心学生が少なくないようだが、それでも学会活動を活性化し、その内容を豊かなものにして欲しいという思いを強くしている。

今後は、学生自身の研究活動を紹介し、またユニークな活動をしている個人や団体を取材し、それを『ゆうかり』に掲載するなどして、機関誌の内容充実を図ってもらいたい。学会活動を活性化すれば、その成果を共有できるし、そのことが地域社会における大学の役割を果たすことにもなる。この『ゆうかり』が、社会福祉学会の会員たちの知的交流を促し、さらなる飛躍・発展の糧になるよう期待したい。

(鹿児島国際大学大学院客員教授)



社会福祉学会創設 40 周年に向けて



元社会福祉学科介護福祉士課程 田中 安平

1982 (昭和 57) 年に新設された社会学部 (社会福祉学科・産業社会学科) は、鹿児島短期大学の改組転換に伴い、2001 (平成 13) 年 4 月に福祉社会学部と名称変更し、三学科 (社会福祉学科・現代社会学科・児童学科) 体制になった。

学会に関しても、1982 年の設立当初の一学部一学会から、学科の特色を生かすべく 2001 年には一学部三学会 (社会福祉学会・現代社会学会・児童学会) 体制になった。大学名においても、鹿児島経済大学から 2000 年には鹿児島国際大学へと改称された翌年の事である。

私が奉職したのも、時を同じくして 2001 年 4 月の事である。着任して厚労省へ赴き、介護福祉コース (現介護福祉士課程) 定員 30 名の認可申請のヒアリングに臨んだことが、つい昨日のことのようと思われる。

2002 年になると、社会福祉学科は①福祉・計画コース (社会福祉士受験資格)、②心理・教育コース (教員免許)、③医療福祉コース (精神保健福祉士受験資格)、④介護福祉コース (介護福祉士資格取得) の 4 コース体制となり、今日の福祉系のすべての国家資格取得に対応でき、ダブル資格 (社会福祉士 + (教職または精神保健福祉士、あるいは介護福祉士)) を取得することの可能な社会福祉専門の学科としてスタートしたのである。

2002 (平成 14) 年の介護福祉コース一期生は 17 名が専攻し、初年度であったにもかかわらず、5 人の社会福祉士資格とのダブル資格者が誕生した。翌年の 2 期生は 24 名が専攻し、11 人がダブル資格保有者として卒業していった。3 期生では 29 名の専攻生のうち 12 人が、4 期生で 19 名中 9 名が、5 期生で 21 名中 10 名がダブル資格保有者として誕生したのである。

このころの社会福祉学科入学定員では、2001 年までは 120 名であったのが、2002 年には 150 名定員になるなど、社会福祉学科の教員・学生において最もエネルギーで発展的な時代であったと思う。

新入生ゼミナールにおいては、ゼミ長の計画のもと卓球等のレクも取り入れながらゼミ生間のわだかまりを取り除き、不本意入学というネガティブ思考の払拭に努め、中途退学者ゼロを目指したものである。

演習 I (3 年次)、演習 II (4 年次) のゼミナールにおいても、年に 1～2 回のゼミコンを学生主導のもとで開催していたものだが、それも今では楽しい思い出である。

社会福祉学会においては、社会福祉学科長が社会福祉学会長を兼ね、学生主導による論文発表会などが活発に実施されたものである。

社会福祉は生活支援の要である。鹿児島国際大学の社会福祉学会がますます発展されますことを祈念して、40周年記念の言葉とします。



平成 20 年度卒業のゼミ生との記念写真



社会福祉学科 40 周年に寄せて

野田 隆峰

鹿児島国際大学福祉社会学部社会福祉学科の創設 40 周年を心よりお祝い申し上げます。

私は社会福祉学科で精神保健福祉士国家資格の法制化がスタートして以来、20 年ほどその養成に携わってきました。

鹿児島県は全国でも精神科病院・病床数の多い地域です。就任の打診があった時点から、就任後、そして今日にいたるまで、これから精神保健福祉士が果たしていく役割に大きな可能性を感じてきました。個人的には、県内すべての精神科病院に本学の OB を配属し、積極的な連携をとっていける体制をとろうと考えてきました。

社会福祉の教育研究機関に転職して 2～3 年は全く分からない世界だったのを思い返します。先生方と話をしたり、学生話を聴いたり、テキストを読んだりする中で、自分の専門と社会福祉がオーバーラップする部分が非常に多いことに気づきました。「精神科医」という肩書は脇に置いておき、「精神病理の分かる福祉系教員」として生きてきたように思います。

一方、20 年大学の教員をしながら若者の気質の変化を感じていました。当初はエネルギーをしっかりと発揮できる若者たちが多かったです。しかしながら、だんだんとそうした学生達も減ってきましたね。エネルギーを持っているけれども発揮できない、大人しい若者が増えてきました。だからこそ、話を聴き、エネルギーを引き出し、育て、若者らしさを発揮できるように教育を通じて働きかけてきました。

講義・演習・実習指導は、平凡が嫌いだったのでよく課外授業をしました。精神保健福祉士課程の「そうめん流し」もその一つ。学生たちと同じ釜の飯を食べ、学校以外の場所で相互にコミュニケーションを取ることがとても重要でした。クリスマスも正月もない国家試験勉強中の追い込みの時期に息抜きのひと時として行ったクリスマスパーティもいい思い出です。

私は、「本学の精神保健福祉士課程の魅力」が、「鹿児島、九州、全国での精神保健福祉士の魅力」になると思ってきました。そうした意味において、本課程が積み上げてきた実習報告会の内容や精神保健福祉士コース同門会、専門職団体との連動、繋がりはこれからも絶やせずに続けていってほしいですね。

新しい教員に入れ替わって、教育の質も高まったと思います。でも、教え過ぎず、学生が考え、能動的に動くために意識的に手を抜いてもいいのではないかと思います。臨床と一緒に、人対人のかかわりと繋がりを意識しながら、楽しく講義して行ってほしいです。

最後に、鹿児島国際大学での 20 数年は楽しい人生でした。学生との対話は私の人生に対する最高のプレゼントでした。ライフワークとしていた、「人間学」の構築につながったと思っています。感謝！

本学社会福祉学科創立40周年を祝す

鹿児島国際大学 名誉教授 蓑毛 良助

本学社会福祉学科が、1982年に創設され、2022年に創立40周年を迎えましたことに心からお慶び申し上げます。その後、2001年に大学院福祉社会研究科博士前期課程（修士）、2007年に博士後期課程（博士）が創設された。

九州で2番目に創設された社会福祉学科を盛り立てようと、学生・教職員が一体となって取り組んだ。学生と教員は、講義・演習・実習に熱心に取り組み、社会福祉制度やソーシャルワークの理論と実践の統合を目指した。また、共に創設された産業社会学科の教員・学生との交流も活発であった。

一期生の学生たちは先輩がいない中、ボランティアサークル「ふれあい」・「ひまわり」を創設し、各施設と協力して熱心に取り組んだ。また、阪神大震災では、神戸市長田区の復興ボランティアとして参加し、全国からのボランティアのリーダーとなり、長田区社会福祉協議会に就職する学生もいた。

教員も個性豊かで、学問に対する熱い討論が繰り返され、社会福祉分野の理論と実践の構築に尽力した。教職員組合活動も活発で、学園側と大学の将来計画や待遇改善について根気強く討論した。

学生募集で教職員が手分けして九州・中四国の高校を訪問した。初期の学生では、県内出身者と県外出身者が、半々であったが、その後九州各県の大学に、社会福祉学科ができたこともあり、次第に県内出身学生が増え、現在9割近くを占めるようになった。

また、関係の教職員が、社会福祉実習施設の開拓や、特別支援学校での教育実習校の開拓に努めた。印象深かったことは、当時の社会福祉施設には、経済学部出身の学生が多く働いており、ほとんどが転職組であった。

さらに、学生たちの就職地の開拓で九州・中四国の施設・機関を、教職員が手分けして訪問し、就職への理解をお願いした。一方、学生たちは社会福祉の理論と実践の統合に取り組み、社会福祉士、介護福祉士、精神保健福祉士の国家試験や、教職にも挑戦するようになった。学生たちも、一般学生の他に、社会人学生・障害学生（視・聴覚障害・肢体不自由）・留学生など多様化し、学内で共生化が推進された。この共生化は、視覚障害学生には点訳者の配置、聴覚障害学生にはノートテイクや手話通訳、肢体不自由学生にはバリアフリー等、大学当局・学生・教員の協力や、学生自身・ご家族の努力によって実現した。留学生も日本語と専門教科の習得に努力した。こうした対人援助の理論と実践力は、卒業後の各分野で活用され評価されている。

この共生・共学の体験の中で育てられたことは、卒業後にも役立ったと考えられる。留学生を含む学生の多くは、卒業後国内外の福祉・教育・企業のリーダーとして活躍している。

大学院生も修士論文・博士論文の作成に努力し、専門学校・短期大学・大学の教員になったり、施設・教育・企業のリーダーとして活躍している。大学院の創設により、学問の世界が深まったといえる。

社会福祉学科はこの40年で確実に成長し、地域貢献してきたといえる。これも、大学当局・学生・教員の尽力によるところが大きく感謝したい。これからも、学内外の学会や地域の要望にしっかり応えられる学科として成長することを期待している。

私個人としては、教育・研究に自由に取り組むことができた。一方、学生たちとの演習・調査、大学祭への参加、ゼミコンパ、卒業旅行等、キャンパスライフを大いに楽しむことができた。また、一年間オーストラリアのシドニー大学で、教育・福祉を研究する機会を与えていただいたことに感謝している。私は、学科長・教務部長・学生部長・実習センター長・児童相談センター長・評議員等を担当したので、本学・本学科に愛着があり、これからも学科や卒業生と共に歩んでいきたいと考えている。



この大学祭の写真は社会福祉学科1期生（蓑毛ゼミ）現在59歳。
福祉・教育分野のリーダーとして活躍している（小学校校長、聾学校校長 他）。

ソーシャルワーク実習 一学生の感想と教員のコメント

社会福祉学科では、社会福祉士国家資格の受験資格取得のために3年生のときにソーシャルワーク実習を行います。今年度の実習について、分野ごとに学生の皆さんからの感想や担当教員のコメントをいただきました。

障害児者分野 松久保和俊先生担当

障害児者分野での実習を通して

3年6組13番 政所 敬恵

私は、障害児・者分野での実習を8月8日から9月7日に行いました。初めてのソーシャルワーク実習ということもあり、緊張することばかりでした。私の実習先では、他職種連携の機会がとても多く、ソーシャルワーカーとしての役割だけではなく、幅広い専門職について学ぶチームワークの大切さを知りました。実習中は、実際の現場を見学などし、講義だけではわからなかった現場の生の雰囲気の中で、多くの学びを得ることができました。利用者の方との職員の関わり方を見て、コミュニケーションの図り方や信頼関係の大切さなど、1ヶ月ではなかなか習得は難しいことなどもありましたが、たくさん知る機会がありました。

事例研究では、自ら個別支援計画を立てアセスメントが利用者の方の状態を正しく理解するためにも、とても重要なものであることが分かりました。

今回の実習では、コロナ禍の中不安もありながら、実習を最後まで行うことができました。

実習で学んだことは、今後の将来にも繋がることとなります。今回至らなかったことは、次回の課題として残りの学生生活で、取り組んでいきたいと思います。

高齢者分野 川崎竜太先生担当

高齢者分野での実習を通して

川崎 竜太

今年度の高齢者分野は、2クラスで合計19名の学生が実習に臨みました。新型コロナウイルス感染症の影響が残る中で、実習を受けていただいた実習施設・機関の皆様のおかげで、19名全員がソーシャルワーク実習を終了することができました。

感染拡大の状況においても、高齢者施設・機関の皆様が感染症対策を講じた中で様々な実習プログラムを準備していただき、学生自身も実習開始前から終了するまで細心の注意を払いながらの実習となりました。実習を終えた学生は、自分で考えた実習計画に取り組みながら、高齢者分野におけるソーシャルワークの実際について実践的に学ぶことができました。日々の記録作成やケアプラン作成など様々な経験を積む中で、「ソーシャルワーカーになるためには何が必要なのか」を考え、それぞれの答えを出すことができた実習だったと思います。

実習終了後は、学生自身が感じた課題や達成できたことなどを個人やグループで振り返り、次につなげるための学びを行いました。実習報告書作成やグループワークを通して、自己の

振り返りや他のメンバーの体験を共有する中で、新しい気づきに出会えたと思います。以下に、実習生から後輩に向けたメッセージの一部を記載します。

今回の実習を活かして、今後の学生生活、その先の未来に向けて、自分を成長させるための努力を続けてくれることを期待しています。

※後輩へのメッセージ

- ① 実習が始まると大変なことが多いですが、自分が立てた実習目標をどのように達成するか考えて実習に取り組んでください。
- ② 実習先の職員の皆さんに、積極的に質問してください。丁寧に教えていただければと思います。
- ③ 体調管理をしっかりして、生活リズムを整えて、実習に臨んでください。

こども分野
有村玲香先生担当

子ども分野での実習を通して

3年3組8番 竹波 希春

私は、子ども分野の「南さつま子どもの家」で実習をさせて頂きました。コロナ禍において実習の受け入れをしてくださった施設長先生をはじめ、実習担当職員、ホーム実習で関わらせて頂いた関係者の皆様には心から感謝申し上げます。

1ヶ月間のホームでの実習を通して、子どものストレングスを見つけ、関係性を構築していくプロセスやソーシャルワーカーの支援技術・知識を学ぶことができました。年齢や発達段階に合わせたコミュニケーションを取ることに、ホームの生活支援業務に取り組みながら子どもとの関わりに偏りがないようにすることが特に難しかったです。

その過程では、実習担当職員からスーパービジョンを受けてソーシャルワークを実践し、子どもとの関わりの中で変化が現れ、やりがいを感じることができました。

最後に、本実習で学んだことを活かし資格取得に向けて更に視野を広げながら、理想のソーシャルワーカーに近づいていけるよう努力し続けていきます。

福祉事務所分野
大山朝子先生担当

福祉事務所での実習を通して

3年6組4番 川井 泰成

私は奄美市福祉事務所で実習を通し多くのことを学び、考える機会を得た。なかでも印象に残っているのは、保護課での実習である。保護課では生活保護業務と生活困窮者自立支援の業務について実習をさせていただいた。生活保護業務の実習では、様々な保護受給世帯の家庭訪問に同行させていただいたが、訪問の前にはその際に受給者の方々に対し、留意すべきことについて説明を受けた。訪問中はケースワーカーの方と受給者の方の日常的な会話から聞きたいことへと話題をつないでいくコミュニケーションの取り方やその大切さについて学び、受給世帯の状況によって必要とされる他機関との連絡調整などについても見学させていただいた。当然ではあるが、それぞれの世帯で受給の理由が異なっており、それに伴い支援の方法もさまざまあることを学んだ。また、奄美市の保護受給率は65%と全国的にも非

常に高いため、生活困窮者を支援するために生活保護制度の存在は非常に大きいと感じた。

今回の実習を通し、保護課以外にも福祉政策課、高齢者福祉課等、奄美市における福祉行政の現場を体験させていただいたが、特に少子高齢化の現状や生活保護の受給率の高さなど奄美市ならではの課題を知ることができた。この実習を通し、自分が生まれ育った地域のことを考え、また自分にとって大切なものについて考える貴重な機会を得ることができた。

福祉事務所での実習内容はソーシャルワークの「ミクロ・マクロ・メゾ」領域の視点が盛り込まれているため、自分にとって大変有意義な実習となった。コロナ禍にもかかわらず実習を受け入れてくださった福祉事務所の実習指導者をはじめ、お世話になったすべての方々や利用者に感謝したい。

**社会福祉協議会分野
高橋信行先生担当**

**社会福祉協議会分野での実習を通して
高橋 信行**

2022年度の社会福祉協議会での実習は9名の学生が実習を無事終えた。2021年度に続き、2022年度もコロナの猛威の中、さまざまな実習プログラム上の制約を受けながら、実習を終えた。ことに体験的なプログラムが、スタッフの語りや講話で対応せざるを得ない事態が続いた。それでも他分野の実習に比べると実習中止や延期は少なかったと思う。

今回実習指導をしながら、あらためて地域福祉を展開する社協の実習の難しさを痛感した。他の実習であれば、ルーティンとして、サービスが一貫しており、繰り返しの中かで利用者との援助関係を結びやすく、また支援計画等についての取り組みもしやすい。

ソーシャルワーク実習のなかでは、多くの実習が契約に基づくサービス利用者に対して自身の施設・機関の機能に即して個別支援活動を行うことに主眼があるのに対して、社協実習は、さまざまなサービスを総合的に実施する活動の豊富さにあるが、それが故にじっくり1つのケースに対して、支援計画に即してサービス提供をしていくという側面が薄いということがある。一時社協の多くが実施していた介護保険に関わるサービス事業も、実施社協が減ってきており、逆に生活困窮者支援に力を入れている社協が増えている。事業内容そのものの変化とともに、コミュニティを基盤としたソーシャルワーク展開のなかでは、しばしば、地域住民やボランティアとの関わりも重視される。

ある学生の事例は興味深い。ひとりの地域住民は、部屋はちらかっているものの、本人は問題にしていらないし、訴えられるニーズも特にない。しかし本人は気づいていない危うさもある。近所との間には、たまにトラブルがある。契約に基づくサービス提供という点では、彼はサービス利用者ではない。であるから他の施設機関にとっては、支援対象にならないひとたちかもしれない。しかし社協はそれとなく関わる。それがコミュニティ・ソーシャルワークを展開する社協事業の特徴ともいえるだろう。

旧カリキュラムとしての最後の実習となり、再来年度からは、実習時間を増やしたあらたな実習がはじまる。それに向けて、現場との調整や連携がこれまで以上に必要になることをひしひしと感じている。

私は米盛病院で180時間の実習をさせていただいた。実習を通して、MSWの病院での役割や業務について、また患者様や家族とのコミュニケーションの取り方、多職種カンファレンス、ベッドコントロールなどを学ぶことができた。なお、米盛病院では、転院・退院調整を毎日行っており、新しい患者様が迅速に入院できるようにベッドの空きを作り調整を行っていることなどを見て、適切で正確な調整が求められる職種であると考えさせられた。さらに回診やカンファレンスなどほかの職種と直接患者様の状態を確認し、多職種で最適な支援ができるように情報を提供することの大切さを学んだ。

実習を終えて、他の職種から情報を収集し、患者様の希望に沿えるように調整していくことができ、コミュニケーション能力を身につけ、会話の中で本人のニーズを見つけ出し、様々な患者様や家族に対応でき、また、患者様や家族、他の職種との信頼関係を築き上げ、支援することができる環境を作り上げることができるソーシャルワーカーになりたいと思った。また私のソーシャルワーク実習を端的に表現するなら、人と環境の接点、対人援助・コミュニケーションに気付くことができた180時間であったといえる。ソーシャルワーカーは、人だけでなく、その周りの環境も把握し、対処していくことが重要になると思った。また、普通に会話できる人だけがいるのではなく、失語症などうまく会話ができない人がいる中でもコミュニケーションをとることができるようになる必要があることを知ることができた。

私は、患者様との面談の中で、緊張して声が小さくなり、質問する内容を忘れたりなどうまくコミュニケーションをとることができなかった。そのため、様々な患者様とコミュニケーションが取れる能力を身に着けることを心がけていくことが今後の私の課題である。初対面だと緊張し、うまく言葉を伝えることができない場面もある。そのため、聞き取りやすい声や笑顔で会話することができるように日ごろから訓練をしていきたいと思った。また、情報収集から推測するだけでは、ただサービスを押し付けるような形になっていたため、患者様が本当にそれを望んでいるのかななども考え、面談の中で相手の意思を尊重し、適切な支援を考えられるようにしていきたいと思った。

コロナ禍において業務もお忙しいなか、地域医療連携室の皆様をはじめ、多職種の方々に多くのアドバイスをいただき、学びの深い実習となった。関係の皆様感謝申し上げたい。



精神保健福祉援助実習について

林 岳宏・茶屋道 拓哉

本課程では、精神保健福祉援助実習とその関連科目である精神保健福祉援助実習指導Ⅰ～Ⅲ、精神保健福祉援助演習を連動させて、より深い気付きと学びが得られるような工夫を行っています。令和4年度は、新型コロナウイルス感染症の影響を受けながらも、現場の指導者の皆様の多大なご協力もあって、コロナ禍前に近い形で現場での実習を行うことができました。ここでは、例年の実習計画に加え、令和4年度の実習についてご紹介させていただきます。

例年の年間スケジュールとしては、前期に精神保健福祉援助実習指導Ⅰで事前見学実習を行います。鹿児島市保健所ではスポーツ交流会などに参加します。また、鹿児島市精神保健福祉交流センター（通称は一とぱーく）、鹿児島県精神保健福祉センターでは講義を、県立始良病院、谷山病院、および松下病院では見学を、地域活動支援センターひだまりでは当事者との交流を行い、学びを深めていきます。実習指導Ⅱでは事前指導と事前協議会を実施して、実習指導者との協力関係を築いています。令和4年度は、スポーツ交流会が日程変更もあり不参加となるなどしましたが、何とか当事者の方と交流する機会を持つことができました。事前協議会と事後協議会は、ハイブリッド（対面とWeb会議システムの併用）で開催しました。

例年は、夏季休業中に障害福祉サービス事業所8日間（64時間）と病院20日（160時間）、合計28日間（224時間）の実習を行います。令和4年度は、事業所実習を6月に行い、病院実習を夏季休業中に行いました。いずれも、何とか現場での実習を行うことができました。学生の配置は、いずれも1～2名ずつの学生の配置としました。学生にとっては、複数の学生で実習できたほうが心強いと思います。しかし、より安全に実習を行うために、感染対策としてこのような配置としました。巡回指導は、対面もしくはWeb会議システムを用いて行いました。学生同士が議論する機会は、帰校日などになります。実習途中の帰校日は、感染対策のためにWeb会議システムで帰学指導を行いました。実習終了後は、対面で行いました。一部の病院実習では、感染対策のために日程等が大きく変更になることがありました。このように、コロナ禍前の実習と比べると、学生にとってきつい場面もあった実習になったかと思います。しかし、今年度の学生は、2年生以降はコロナ禍での大学生活を送っている学年であり、きつい場面でも臨機応変に対応しようと、それぞれが工夫しながら努力していました。実習終了後の帰学指導では、学生が頼もしく成長していると感じられ、その日のことは今でもよく覚えています。

後期に入ると、実習指導Ⅲの中で実習に関する学びを総括し、実習報告書を作成していきます。例年、そのプロセスの中で、経験的な学びを理論的な学びに深めていきます。そこでは、学生個人の経験を課程学生全員で共有しながら、議論を交わしながら実習報告書を作成していききました。これを達成することができた背景には、環境面で大きな変化があったこと

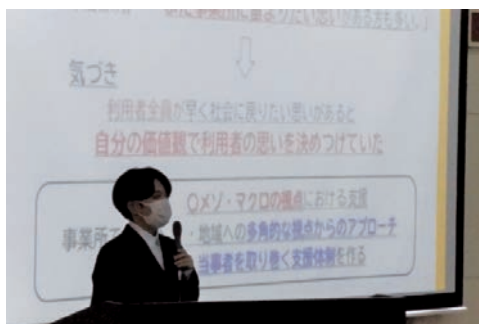
があります。令和3年度後期から、5号館3階に「精神保健福祉実習室」が完成し、実習報告書作成にあたり、学生達は集中して心置きなく充実した議論を交わすことができました。

実習の発表の場である実習報告会は、例年どおり対面で行うことができました。今年度も昨年度同様、学生の発表ごとに、その学生の実習指導者の方にコメントをいただくこととしました。実習指導者の方々からは、学生へ丁寧で貴重なフィードバックがなされました。学生は、そのフィードバックから、大きな自信と安心感をもらうことが出来たと思います。

学生は実習を通して、精神科病院や障害福祉サービス事業所の現状を学びます。さらに、当事者とその家族の方々の想いや葛藤、人間的理解を深め、自己覚知していきます。そして、当事者の生活する環境としての精神科病院や事業所の在り方に気づいていきます。学生は実習前にそれぞれテーマを設定します。実習後にそれを振り返りながら、「自分にとって精神保健福祉士とは」「どんなソーシャルワーカーになりたいか」を考えていきます。私達教員は、学生同士が議論していくことで、学生自身がそれを見出すように支援します。

また、学生は、精神保健福祉士が当事者とその家族へどのように関わっているかも学びます。そして、他職種のスタッフが、精神保健福祉士に対してどのような理解をしているのかを学んでいきます。当事者とその家族、さらに彼らを支援している援助スタッフとの相互作用を見出すことが、学生の課題となります。最終的には、学生自身の生き方について洞察し、自己覚知を図ることになります。

令和4年度の学内代替実習も、コロナ禍での実習でありながら、学生自身の洞察や自己覚知は十分図れたものと考えています。コロナ禍の状況にもかかわらず、多くの精神科病院、障害福祉サービス事業所、保健所や精神保健福祉センターに実習を受け入れていただきました。臨床での実践的な学びを通じて、学生も精神保健福祉士としてのスタートラインに立つ準備が整ったように感じています。ご指導いただきました、実習指導者の方々に心より感謝申し上げます。次年度も、学生と実習指導者の方々とともに、より実りある実習の実践を目指していきたいと思っています。



介護実習

岩崎 房子

介護福祉士国家試験受験資格を取得するためには、卒業までに3回の介護実習を履修する必要があります。介護実習Ⅰは1年生（春期休暇中；10日間：80時間）、介護実習Ⅱは2年生（夏季休暇中；22日間：170時間）、介護実習Ⅲは4年生（夏季休暇中；25日間：200時間）、計450時間と、学内で一番多く実習を行います。

介護実習は、基礎疾患を抱える高齢者の方々を主な対象者としているため、コロナ禍における施設実習実施の判断は慎重にならざるを得ず、今年度も学内実習となりました。

以下に、夏季休暇中に実施された介護実習Ⅱ・介護実習Ⅲの主な内容を紹介します。

	介護実習Ⅱ（2年生）		介護実習Ⅲ（4年生）	
1 週 目	講義 Zoom	・オリエンテーション ・栄養 ・障害児者支援施設 ・リスクマネジメント ・多職種連携とチームケア ・サービス担当者会議	・感染予防について ・記録の書き方 ・災害介護 ・介護と医療の連携 ・看取り、ターミナルケア ・チームマネジメント	
2 週 目	講義 Zoom 実技	・認知症高齢者の介護 ・特別養護老人ホーム ・看護小規模多機能・多職種連携 ・特別養護老人ホームでの介護ロボット、ICT活用、科学的介護 ・施設におけるリスクマネジメント ・実技（シーツ交換、食事介助、更衣介助） ・Zoom：住宅型有料老人ホーム（見学と意見交換） ・Zoom：施設カンファレンス（見学と意見交換） ・Zoom：介護スタッフとの意見交換	・老人保健施設 ・対人援助職における個人情報保護	
3 週 目	講義 演習 実技 Zoom	・レクリエーション企画・準備 ・医療型障害児入所施設療養介護事業所 ・訪問介護員 ・Zoom：施設の取り組み紹介（見学・意見交換） ・Zoom：AIを活用した褥瘡予防の取り組み ・実技（移乗・移動介助、入浴介助、排泄介助）	・施設運営・管理 ・地域拠点としての施設・事業所の役割 ・調理実習	
4 週 目	講義 演習 実技事例検討会	・地域における生活支援 ・介護過程展開 ・実技事例検討会（2事例）		
5 週 目	講義 レク発表会 介護過程検討会	・レクリエーション発表会 ・介護過程検討会 ・介護保険制度 ・学生フリートーク ・記録	講義 レク発表会 介護過程検討会	・レクリエーション発表会 ・介護過程検討会・介護保険制度 ・訪問介護員の業務と役割 ・サービス担当者会議（訪問介護） ・在宅介護と医療の連携 ・地域包括ケアシステムと訪問介護 ・学生フリートーク ・記録

コロナ禍の影響で、学内実習は今回で3回目となりましたが、現場の方々のご協力もあり、実り多い実習になりました。以下は、学内実習を終えた2年生、4年生の感想です。

★2年1組12番：平原愛さん

今回の学内実習は、4年生と一緒に受講することもあり、新たな学びや気づきを得ることができて、とてもよかったと思う。介護過程やレクリエーション企画、講義後の質問などの様々な場面において4年生の意見を聞くことができ、知見を広げることができた。特に介護過程では、同じ時間で2年生は1項目を展開したのに対し、4年生は全項目を展開し、しっかりと情報が整理され、利用者様を主体としたアセスメントができていて、4年生の利用者把握表はとても参考になった。

★2年4組1番：飯田珠莉さん

今回の実習は残念ながら学内で行うこととなったが、先輩方との交流やグループワーク、先生方のアドバイスを通し、自分に足りないところを再確認することができた。これからも主体的に復習や情報収集、そして意見交換に励んでいきたいと思う。

★4年5組1番：大里実希さん

施設実習を行うことはできなかったが、外部講師の方々の現場でしか聞くことのできない貴重な講義を受けることができた。気づきも多く、分からないことがあったときに、教員や友人に質問しやすい環境で実習を行うことができ、学び多い実習になった。

★4年4組3番：草野春香さん

今回、2年次に続いて、2度目の学内実習となったが、介護過程検討会や調理実習といった新しい試みもあり、より学外実習に近い実習になったのではないと思う。介護過程では、先生から意見をいただいたり、調理実習では、そこにある食材で何ができるかを考えたりと、学びの多い実習になったと思う。

★4年4組1番：臼田美佳さん

今回の介護過程は、グループで展開を行った。グループで行うことで勉強になることがとても多かった。一つの情報に対し、私と同じようなアセスメントしている人、私のアセスメントより何歩も進んだアセスメントをしている人、また、異なったアセスメントをしている人もおり、情報の捉え方の視野が広がった。そして、利用者様の言葉の背景にある思いを汲みとることも重要であることが実感できた。介護過程の展開には、介護の知識に加え、医療の知識、社会福祉に関する知識など、多くの知識が必要である。一人ひとりの生活を支える観点から、柔軟性も必要であることに改めて気づくことができた。

★4年41組1番：大原美岬さん

多職種連携を行ない、多くの職種がそれぞれの役割を分担しながら協力することで、利用者様のニーズに合った介護になると思う。そのため、他職種の領域を理解し、対等に意見や情報共有ができる関係が大切なのだと思う。一方向からの支援ではなく、多方向からの支援を行うことの重要性を今回の実習で理解することができた。

★4年5組4番：神崎末有さん

様々な現場の方の講義を聴講する中で一番印象に残ったのが、介護ロボットやICTを活用した科学的介護を用いた支援の方法であった。Zoomを通して実際にデジタルセラピーの様子を見ることができた。利用者様の感情を数字で測定できることで、自分の感覚とデータとで照らし合わせることができ、よりよい支援の提供につながるとともに、介護者側も根拠に基づいた支援の提供につながると感じた。

来年度こそは、学外実習で利用者様や職員の方々から多くのこと学べますように！！

教育実習

古賀 政文

教育課程は、特別支援学校教諭、高等学校教諭（福祉、公民）、中学校教諭（社会）の教育職員養成を目的とする課程です。本学では、それぞれの免許状取得のため、主に5月から6月に掛けて中学校・高等学校での教育実習を、9月から10月に掛けて特別支援学校での教育実習を行います。

今年度は、新型コロナウイルスの影響が少なくなり、ほぼ計画どおり、教育実習が実施され、学生の皆さんは教育実習を無事終えることができました。

今年度教育実習を行った学生の感想を紹介します。（教育実習報告会の資料から）

中学校・高等学校

実習校から指導・指摘されたこと

- ・ 言葉遣い、生徒に対する話し方に注意する。（教師としての距離感を！）
- ・ 教育実習生であっても「責任感」と「熱意」をもって取り組まなければならない。
- ・ まずはあいさつ。元気よく明るくだれにでも。
- ・ 学級の全員と、実習中には必ず何らかのコミュニケーションを図ること。
- ・ 生徒一人一人の反応をしっかり見ながら授業を進める。
- ・ すべての基本は「教材研究」を充実させることから。
- ・ タブレットが配備できているため、使いこなす練習が必要。
- ・ コロナ禍で窓を開けているため、声が十分に通らない。
- ・ 生徒には、あくまで公平公正に接すること。（性別・学力・服装等にかかわらず）
- ・ 生徒の自己肯定感を高めるため、「分かった」「できた」「伸びた」を実感させる。
- ・ 先輩教諭の「よい」と思った部分は、積極的にまねる姿勢で実習期間を過ごす。
- ・ 教師の一方的な説明ではなく、生徒との「対話的な」授業を心がける。
- ・ 授業の中でも生徒指導の上でも、常に特別支援的な視点を大事に臨むこと。
- ・ 生徒の実態把握が出発点。授業においては、まずこの実態把握をしっかり。
- ・ 個の活動なのか、グループ学習なのかのめりはりをはっきりさせること。
- ・ すべてにおいて大切なことは「時間を守る！」こと。間に合えばいいものでない。
- ・ 生徒は思う以上の力をもっている。説明しすぎず投げかけてみればいい。
- ・ 実習期間、生徒からちゃんと「先生」として見てもらえるような態度で臨むこと。
- ・ 授業の中で大切にしてほしいのは、生徒に考える時間を与えることである。
- ・ 教師である立場の自分がまず楽しまなくては、生徒も楽しいはずがない。
- ・ 生徒の様子をじっくり観察して、少しの変化にも気付くことが大切になる。
- ・ SNS には、実習に関することを絶対にアップしないこと。

- ・ 1 単位時間の中に盛り込みすぎず、目標を明確にもつこと。
- ・ タブレットや電子黒板を活用した ICT 使用の授業を考えておくこと。
- ・ 教師は「教える専門家」であると同時に「学ぶ専門家」でもある。
- ・ 報告・連絡・相談をしっかりと、特に障害のある生徒には共通理解で臨みたい。
- ・ 生徒の理解度には差があるため、苦手な生徒への配慮を欠かさない指導をされた。
- ・ 大学での模擬授業とは人数も大きく違い、生徒目線で話す大切さを教わった。
- ・ 当然ながら、通勤に関しての交通事故、交通違反に十分注意するよう指導された。
- ・ 指導教諭の「先生は生徒より先に生き生きとしなければ駄目」の言葉が刻まれた。
- ・ 学校は様々な要因から成り立っている。自分以外の生徒、他教員との連携を密に。
- ・ 実習期間というものは、これまでの自分の人生を見つめ直せる期間にしてほしい。
- ・ 発問は、生徒に分かりやすく、生徒が答えたくなるような言葉を選んでいく。
- ・ 指導に当たっては、生徒の人格を否定してはならない。言葉を選ぶように。
- ・ とにかく、実習生だからと言って絶対に「無責任」な授業をしてはいけない。

アドバイス等

- ・ まずはよく聞くこと。健康管理に気を付けコミュニケーションを楽しんでほしい。
- ・ 運転して実習に通う人は、いつも以上に疲れと緊張があるので十分に気を付けて。
- ・ 私たち実習生の「やる気」が伝われば、必ず実習はうまくいくと信じて！
- ・ 指導を受けた部分については、謙虚に聞き入れる姿勢が一番。
- ・ 先生方は、忙しい通常業務の上に受け入れてくださることを忘れないように。
- ・ 早めに、今の生活と違う「生活リズム」に慣れておく必要がある。
- ・ 気付いたことは、すぐにメモを取る習慣を、実習前に身に付けておくことよい。
- ・ 実習日誌や講話は、できるだけ「その日のうち」に終わらせておくこと。
- ・ 一足先に社会人の準備ができるチャンス。特に「報告・連絡・相談」を学びたい。
- ・ 頼ってしまうことを恐れず、迷ったら「聞く」姿勢が大切になる。
- ・ 自分のパソコンはやはり必要。始まる前に、ある程度の準備ができていくはず。
- ・ 先生は、話のプロ。授業においては話術が必要になる。模擬授業で十分練習を。
- ・ 教材研究をしっかりと行うことと同じくらいに、休むことも必要。
- ・ 朝のあいさつ運動や清掃にも、ぜひ積極的に参加してほしい。
- ・ 想像以上に自分の時間はないと思ってほしい。早めの準備が自分を助ける。
- ・ 先生からの課題があれば、それを超える「 $+\alpha$ 」を返すことを心がけたい。
- ・ 生徒とは名前で話せるよう、早く覚えることが大切。
- ・ 2 週目～3 週目と必ず疲れてくる。第 1 週目にのんびりせず授業を構想しておく。
- ・ コロナ禍にも快く引き受けてくれる相手学校には、深く感謝するべき。
- ・ 一度きりの教育実習なので、全力を出し切ってほしい。違う世界が見えてくる。
- ・ 模擬授業があるときには、ぜひ積極的に経験しておいてほしい。
- ・ 睡眠はたっぷり。学校内での空き時間は有効に使い、家での負担を軽減したい。
- ・ 授業外での先生と生徒のやりとり等、実習でしか経験できないことを存分に。
- ・ 学習指導要領は、しっかりと確認しておいた方がよい。
- ・ 自分の専門分野だけでなく、教師はすべてのことができなければいけない。

- ・ 自分が授業する予定の範囲は予習して、初歩的な質問に答えられるようにする。
- ・ ICTについて、事前にどんなアプリを使っているか等、確かめておく必要がある。
- ・ 実習後半は体力勝負。眠れるうちにしっかり眠って体調を整えられるといい。
- ・ 各教科法で授業の進め方をしっかり学び、自分の力で実習前に理解しておくこと。
- ・ 最も苦労したのが教材研究だった。模擬授業は、数多くこなしておきたい。
- ・ 教育実習の前に、多くの経験を積んでおいてほしい。4年生になると時間がない。
(アルバイトや資格の取得、インターン等、挑戦は早めに早めに)
- ・ 学生自身ががんばっていることを示せば、生徒は必ず何らかの形で応えてくれる。
- ・ 事前オリエンテーションで指導担当者と顔合せをする。ここでの決定事項が大切。
- ・ 実習校が、たとえ母校でなくても事前に HP 等で情報収集しておくとうい。
- ・ 分からないことがあれば、すぐ人に聞くこと。考え込みすぎてはいけない。
- ・ 評価授業を行う際には、事前にシナリオを書いておくとうい。

特別支援学校

成 果

- ・ 実習において、担当クラスの生徒はもちろん、他のクラスや学年の生徒とも関わりをもち、遊んだり話したりすることができたのは成果であるとする。
- ・ 準備と他の先生方と協力する大切さを再認識した。より実行できるようにしたい。
- ・ 指導をどのようにすればよいかあまり分からずに実習に臨んだが、実習で関わりをもったり、先生方と同じように関わったりしていくことで指導をどのようにすべきかについて分かるようになり、完璧にすることはできないが、指導場面を理解することができたことは、個の実習での成果であると言える。
- ・ 実習を通して、ぼんやりとしたイメージしかなかった特別支援学校の一日の流れをしっかりと把握することができた。
- ・ 今回2週間の特別支援学校教育実習を終えて、教育を学ぶうえでとても有意義な実習になったと思う。特に障害のある児童生徒への個別支援や関り方などは、教育の場面のみならず今後生きていく様々な場面で活用できると思う。

課 題

- ・ 評価前授業、評価授業を行うにあたって、授業構成をもう少し分かりやすくできたらよかったし、生徒の実態把握も授業の参加や、日々の生活の様子を通して詳しく行っておけたらよかったとする。
- ・ 生徒の目標は、共通認識しつつ、言葉掛けや対応を統一して指導しなければいけない。
- ・ 2週間では実態把握は足りない。しかし、1日でも生徒に与える影響は大きい。
- ・ 当たり前を当たり前にするのは大変だが、少しずつでもできたらいい。
- ・ 生徒とは、授業中・それ以外の時間でも関わることができたが、先生方と授業や連絡事以外で関わることが少なかったため、もっと多くの時間関わる必要があった。
- ・ 授業で使う教材で反省する点が多かったため、教材作りに力を入れる必要があった。
- ・ コミュニケーション力を身に付けたい。

- ・ 児童生徒の好ましくない言葉遣いや行動等に直面した際、うまく注意することができなかったことである。怒ることと叱ることは全く別だと考えており、児童生徒自身のためにも問題がある言動にはメリハリをもって話をするのであればよかったと考える。

アドバイス等

- ・ 実習日誌は、放課後すぐに書き終えて、残りの時間は授業研究に費やした方がよいと考える。中学校の実習では、学校にもよるが授業研究の時間が一日に数コマ取られている学校もある。しかし、特別支援学校では基本的にずっと授業に参加しているので、中学校の実習と違い、授業研究の時間は放課後や家でしか取れないので、隙間時間で日誌を書き進めるなどして、なるべく放課後は授業研究に当ててほしいと思う。
- ・ 指導案を書く際に、ワードの書き方を知った方がいい。
- ・ データ無制限のスマホのテザリングかモバイル Wi-Fi があると嬉しいですよ。

しっかりご飯を食べて準備も
万全に実習に挑んでね！



新入生ゼミナールのイベント紹介！ 『卒業生との対話』

社会福祉学科 永富 大舗

12月10日、新入生ゼミナールのイベントである『卒業生との対話』が行われました。このイベントは今年度から実施されたイベントであり、卒業したばかりの卒業生を講師として招き、1年生に対して大学生活、就職活動、資格取得のための試験勉強について講話をいただくことで、大学4年間の生活についての見通しを持たせることを目的として実施されました。初めての試みであった今年度は、昨年度卒業した3名から講話をいただきました。

1人目は光陽福祉会きらら館で児童指導員として勤務されている、西ノ園朱音さんでした。西ノ園さんは、介護福祉士、社会福祉士、精神保健福祉士、保育士の4つの資格を取得しており、これから資格取得を検討している学生にとってはとても興味のある内容でした。また、過去問をひたすら解くといった試験勉強の仕方、開店から閉店までファミリーレストランで友だちと勉強をしたなどの試験勉強時のスケジュールなど、学生がイメージできるような卒業生らしいアドバイスをたくさん話してくださりました。

2人目は出水養護学校で教員として勤務されている、竹宮千智さんでした。竹宮さんは鹿児島県教員採用試験で現役合格されており、教員採用試験のスケジュールや試験対策の内容などを具体的に示してくれました。また、卒業後に大学生活を振り返った時、働きながらの試験勉強をする時間がなかなか取れず、取得できる資格は取得しなかった、学校の様子を知る機会がもっとあったら良かった、大学生にしかできない経験をもっとしていたら良かった、などの情報は現在の大学生にとって非常に参考になる話でした。

3人目は鹿児島生協病院で勤務されている、松下大樹さんでした。松下さんはアルバイトからコミュニケーション力や社会のマナーを学んだこと、精神保健福祉士課程での1年間の過ごし方を中心に大学4年生での生活を具体的に話してくださりました。アルバイトと学校生活を両立しながら、就職活動、実習を終え、資格を取得した卒業生からの話は、同じ境遇にある多くの学生にとっては非常に参考になるお話でした。

それぞれの3名の卒業生の講話が終わったのち、在学生と卒業生との質疑応答の時間でした。設定した時間よりも多くの時間を費やしました



が、それでも全ての質問を取り上げることができないほど多くの質問が寄せられ、学生の本イベントに対する積極的な参加と卒業生から助言を得たいことが多くあることが明らかになりました。学生からの質問には、「サークルには入っていましたか？」、「取っていて良かったと思う授業は何ですか？」、「ゼミはどうやって決めましたか？」などの大学生活に関する事、「今の仕事に就く決め手は何でしたか？」、「仕事を決める上で悩んだことはありますか？」などの就職活動に関する事、「試験勉強は1日どれくらいしましたか？」、「大学1年生からできることは何ですか？」、「試験勉強は大学のどこでしましたか？」、「アルバイトやサークルと試験勉強の両立はどのようにしましたか？」、「動機づけを維持させるために工夫したことは何ですか？」などの試験勉強に関する事、「福祉職で大事なことは何ですか？」、「利用者、子どもと関わる上で大事にしていることは何ですか？」など卒業後に関する事について、中心的に質問がありました。卒業生も1つ1つ丁寧に具体的に回答をくださり、学生の悩み、疑問が解消されたと思います。

イベント後、ご講話いただいた卒業生からは、「大学生の一生懸命さに感心し、自分も頑張らなくてはと思った」、「大学に協力できて嬉しかった」などの感想をいただきました。また大学生からは「リアルな話を聞くことができて良かった」、「先輩だからこそ分かることや実体験の話を聞くことができ、大学生活のうちに経験しておくべきことなどが知れて良かった」、「聞きたいこと、知りたいことを聞くことができた」、「近い年代の卒業生からの話を聞くことができて良かった」など、従来の授業とは違い、卒業生という立場の講師から話を聞くことによって得られる学習効果が得られたと思います。また、「毎年参加したい」、「社会福祉士課程、介護福祉士課程、精神保健福祉士課程、教職課程のそれぞれの先輩から話を聞きたい」などの、学生からのイベントに対する肯定的な意見も得られました。

今回、初めての企画でしたが卒業生からの協力もあり、メモをしっかりととりながら顔を上げて講話を聞く学生の様子、活発な質疑応答が行われたことから大成功であったと思います。今後も、学生にとって有意義なイベントを考え、実施していこうと思います。

最後に、勤務して1年目という多忙な中、本イベントのために丁寧な資料を作成していただき、学生からの質問にも丁寧にご回答をいただいた3名の卒業生に心よりお礼申し上げると同時に、これからのご活躍を期待しております。



「演習論文報告会」の報告

演習論文委員 岩崎 房子

社会福祉学科では、4年生が取り組んだ演習論文の成果発表の場として「演習論文報告会」を開催しています。今年も昨年に引き続き、ポスター形式での報告会を12月2日（金）～10日（土）までの9日間、5号館1階学生ホールにて開催しました。興味・関心のあるテーマで取り組んだ11題の力作が報告されました。令和4年度の報告者およびテーマ一覧は、以下のとおりです。

	報告者	テーマ	ゼミ
1	藺田 龍玄	高齢運転者のペダル踏み間違い事故の原因と対策	岩崎ゼミ
2	寺田 優哉	看取りケアの現状と課題	
3	新田 風純	愛着障害のある児童への福祉的支援に関する研究	有村ゼミ
4	図師 海希人	優生保護法の成立と展開 ー優生思想を中心にー	大山ゼミ
5	堂前 映月 三谷 茂将	書字に困難さを示す児童における視覚プロントの フェイディング手続きを用いた指導の効果	永富ゼミ
6	大里 実希	生活保護費内での生活の試みと高齢者の生活を 支える奄美市の取り組みに関する一考察	岩崎ゼミ
7	神崎 未有	音楽と福祉 ー音楽療法を中心にー	
8	中村 瑞紀	ドイツ介護保険制度における介護手当と介護者支援	山下ゼミ
9	小倉 朋也	共生社会の実現に向けての一考察 ー障害分野を中心にー	岩崎ゼミ
10	草野 春香	日本文化とブックカバー	
11	大原 美岬	発達障害の子どもの支援の在り方に関する一考察 ー児童虐待のない共生社会を目指してー	

学生ホールでのポスター掲示ということで、休憩をしながら多くの学生が目を向けていました。また、メッセージBOXも設置しており、「論文が書けるか不安があったが、イメージがついた」「興味のあるテーマの論文があり、大変参考になった」など、下級生からのメッセージが数多くありました。4年生は、大学4年間の集大成となる演習論文を書き上げ、自信につながったことと思います。社会人になっても何事にも探求心を持って取り組んでいってください。また、下級生のみなさんは、4年次の演習論文執筆に向けて、日頃から興味・関心のあるテーマを見つけておきましょう。



社会福祉学会における自主研究助成について

茶屋道 拓哉

鹿児島国際大学社会福祉学会においては、「鹿児島国際大学社会福祉学会・学生会員の自主的な学習・研究活動の活性化を図る」ことを目的に、自主研究助成を行っています。助成の対象は、「自主研究（ゼミを含む）や特色あるボラティア活動・実習活動報告等とする」とされており、1件あたり5万円を上限として総額15万円までの助成額となっています。ここで、少し自主研究助成の申請から報告にかけてのスケジュールを説明させていただきます（図1）。

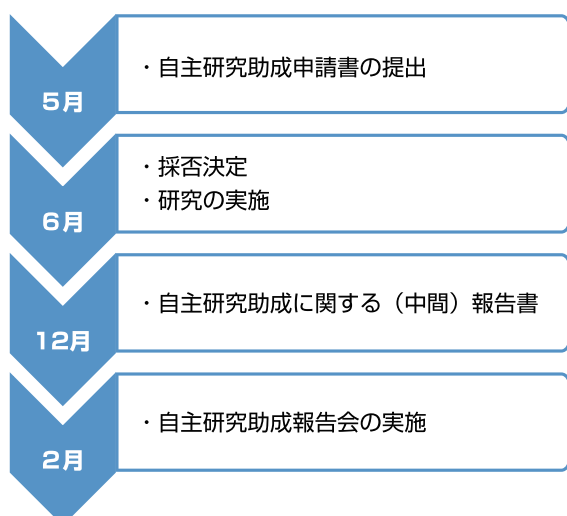


図1 自主研究助成に関する年間スケジュール

例年、毎年5月ごろ申請の受付を行っています。個人申請の場合は本人名で、共同申請の場合は研究代表者名で申請の手続きを行います。審査内容を審査し、採否については6月末に通知するスケジュールとなっています。研究成果発表は、研究成果報告書を学会運営委員会に提出していただき、本誌「ゆうかり」に掲載（中間報告可）、年度末に報告会を実施することとなっています。ぜひ多くの学生・院生の方々に活用していただきたいと思います。

さて、本年度は社会福祉学科の林ゼミ（3年）から申請があり、研究が進められています。テーマは、「わが国における、精神科リエゾンチームについての研究・活動報告状況についての調査」となっております。おりしも、精神保健福祉士法が一部改正（2024年4月1日施行）され、「精神障害者及び精神保健に関する課題を抱える者の精神保健に関する相談」が精神保健福祉士の役割としてこれまでよりさらに踏み込んで明記された所です。そうした意味においても、保健・医療・福祉にさらに積極的にコミットする精神保健福祉士（ソーシャルワーカー）がその視座を広げるため、重要な意義ある研究と感じています。

これからも、こうした研究活動が活発に行われ、地域社会に還元されていくことを応援していきたいと思っています。

わが国における、精神科リエゾンチームについての 研究・活動報告状況についての調査

社会福祉学科3年 井上 世成・稲光 沙羅・軍神 将太郎

末田 百華・横山 空・鮫島 未来

指導教員 林 岳宏

1. 研究の背景

総合病院における精神医療において、チーム医療の実践が欠かせないものとなっている。なかでも、多職種からなる精神科リエゾンチームの活動は、患者を中心とした質の高い医療を提供するために、重要視されている。しかし、各地域の病院の精神科リエゾンチームの活動状況は、一般には把握しにくい状況にある。医療系のデータベースにおいては、診療科別の情報提供が中心であり、チーム活動に関する情報提供は十分とはいえない現状にある。

2. 研究の目的

わが国の精神科リエゾンチームについて、研究や活動状況の報告がどのように行われているかを調査する。各地域での違いや鹿児島県の現状との比較を行うことによって、精神科リエゾンチームの現状を国民に正確に伝えるための課題を明確化することを目的とする。

3. 研究の対象と方法

国内医学論文情報のインターネット検索サービス「医中誌 web」の他、「CiNii Research」「J-STAGE」「Google Scholar」を用いて、わが国における精神科リエゾンチームについての研究・活動報告状況について調査する。報告されている病院や地域、チームの構成などを整理し、各地域での違いや鹿児島県の現状と比較・検討を行う。

4. 期待される成果

わが国の精神科リエゾンチームに関する研究や活動報告の状況を調査することで、各地域での活動状況のある程度類推することができると考えられる。このような調査を行うことは、精神医療において重要な医療サービス情報へのアクセスの課題を明確化することにつながる。今後の精神医療のあり方を検討する上で、非常に有用であると考えられた。

5. 研究の実施状況

2名ずつに分かれて、それぞれのデータベースで「精神科リエゾンチーム」と検索し、文献を抽出した。検索において、2021年12月までに発行された文献を対象とすることとした。「医中誌 web」において224件、「CiNii Research」において47件、「J-STAGE」において123件、「Google Scholar」において125件の文献を抽出した。各文献の内容を、「活動実績報告」「せん妄」「新型コロナウイルス感染症」「救急医療」「自殺対策」に分けて整理した。また、文献に記載されている内容の対象の県や地域を、文献から判断できる範囲で整理した。同様に、記載されている病院数も整理した。調査を進めるなかで、報告内容では報告総数の違いが明らかになりつつある。地域による報告数の違いも明らかになりつつある。

学生を外（フィールド）に連れ出すー「旅する福祉」の真骨頂 PART2 ときを忘れさせる島々「トカラ列島」

社会福祉学科 高橋 信行

「トカラ列島」、十島村での交流のきっかけは、鹿児島県社会福祉協議会の職員からの紹介で、十島村副村長にお会いし、十島村の保健・医療・福祉のあり方についての調査研究事業への参加を求められたことだった。副村長によれば、外海離島である十島村は多くのハンディを抱えており、住民は保健・医療・福祉にかかる恩恵を十分に受けることが困難な状況に置かれている。保健・医療・福祉にかかる諸制度と現状のギャップを検証するとともに、「住民がなすべきこと」、「村行政がなすべきこと」、「県や国に要請すべきこと」を検討して、十島村住民に取り得る必要な保健・医療・福祉にかかる行政サービスを提供するというのが目的である。十島村は、鹿児島本土と奄美群島の中に位置する7つの有人の島と無人の島とからなる小さな自治体である。（当時の人口は676名）そこで2007年5月から1年間、「保健・医療・福祉のあり方に関する調査研究会」がたちあがった。

プログラムの中核は、十島村住民を対象にしたアンケート調査であり、この結果をもとにあり方を検討することになる。高齢層を除く住民は、各島の出張所に箱をおき、調査票を住民に投函してもらおうスタイルにしたが、高齢層については訪問調査の形態をとり、これに学生に参加してもらうこととした。本学のほかに鹿児島純心女子大学の学生も参加した。



各島に学生をおろして、高齢者調査です



船旅は当然、雑魚寝です

ある島においた学生は面談をした高齢者に誘われ、朝早く釣りに出かけ、楽しんだ後、新鮮な魚を刺身にして朝食をとったと満足げだった。ただし、帰りの船が揺れ、全部吐いてしまった。もったいない。

このプロジェクトを契機に、数年間十島村の中之島や平島でもフィールドワークを実施した。当時4年の森田裕子さんは平島訪問（2009年）を次のように振り返っている「9月11日から13日に鹿児島県十島村の平島を訪問しました。平島は、十島村（トカラ列島）の中の住民70人程度の小さな島です。11日の23時半に鹿児島港を出港し、翌8時半に平島入港。午前中は2人1組で高齢者宅を訪問し、保健医療サービスの利用状況や生活の困りごとなど

について聞き取り調査を実施しました。午後からの島内探訪では、大浦展望台から島の全体像や近くの島を眺めることができ、道中、トカラヤギやアカヒゲなど野生動物を見ることもできました。夜には、コミュニティーセンターで住民の方との懇談会が開かれました。住民のうち20代から70代の男女計32名が集まり、高橋信行教授から『十島村の保健・医療・福祉のあり方検討会』の報告や、平島での地域福祉推進についての提案が資料とビデオを用いてなされ、参加された住民の方は熱心に耳を傾けられておられました。また同行された宮崎県小林市社協の前田隆一氏からも、今ある社会資源を活用して小規模多機能施設を作る案や須木村での地域福祉活動の具体例が紹介されると、参加者から多くの意見や質問があげられていました。学生からも高齢者訪問調査の感想や意見を発表させていただきました。今回の合宿を通して、直接住民の方と面接し、お話を伺うことの楽しさや難しさ、島での地域福祉のあり方について新しい視点から考えることが出来、貴重な体験となりました。同時にゼミ卒論の研究テーマに関する質問やアンケート、写真をとらせていただき、離島での生活について理解を深めることが出来ました。今回の資料を加えて、論文をまとめていこうと思います。



平島住民懇談会



気合いの入った女子たち

学生や社会人の参加で賑やかな合宿となった。晩ご飯には、大きな伊勢エビもでた。

離島へのフィールドワークは、準備するのも大変だが、文化交流の側面もあり、「旅する福祉」というゼミのコンセプトからもぴったりの企画だったと思う。



「西鹿児島－東京」が 22 時間だった頃 —時間のパラドクスを想う—

村上 光朗

◇社会学部誕生と「社会学会」の発足

鹿児島経済大学時代、昭和 57 (1982) 年の社会学部創設と同時に「社会学会」(いまの「社会福祉学会」の前身)が発足する。だが、教授陣が半舷上陸だったこともあって、社会学会はほとんど休止状態であった。翌年、全教授陣が揃ったことでいよいよ本格的始動となる。初代運営委員長は小林節夫教授で、朝日新聞論説委員の経歴を持つエネルギーな方であった。

記念すべき第一回運営委員会は、「会則」を決めることからスタートした。そこに集った教員、学生双方の熱気ややる気は相当なもので、「はじめての経験」の魅力に皆一様に酔っていた(私も運営委員のひとりとして参加していた)。社会学会の基本的な活動内容は、現在のそれと大きくは異なっておらず、①講演会の開催 ②自主研究の募集・運営 ③卒業パーティーの開催 ④広報誌「ゆうかり」の編集・発行、の 4 大柱が中心であった。

◇交流・懇親の会と東京への調査旅行

けれども、いまと異なるのは、交流・見学会の企画・実施であった。「生麦事件」の研究で有名な宮澤眞一先生の発案による懇親パーティー(「ザ・まつり」と称していた)には多くの社会学部生が集まり、酒肴を楽しみ、大いに語り合ったものだ。大型バスをチャーターし、地元の放送局(MBC)や企業(本坊酒造など)を訪問した「社会見学」も楽しい思い出の一コマである。

とはいえ、まだ誕生間もない社会学会である。他の福祉・社会学系大学にある学内学会に学ぶことも重要であった。私は、小林委員長から、東京にある日本社会事業大学の学内学会の調査を依頼され、そのための予算もつけていただいた。ただし、使用する交通機関は、「西鹿児島－東京」間を結ぶ寝台特急「はやぶさ」であった。「はやぶさ」は、正午過ぎに西鹿児島駅(現在の鹿児島中央駅)を出発し、実に約 22 時間をかけて、翌日午前 10 時過ぎに東京駅に到着する。何と不自由で不便なことかと、当時は感じていたものだが、いまの感覚からすれば、実に豊かで贅沢な旅時間である。しかし本当に残念なことに、私のよんどころない個人的事情から、この旅は実現せずに終わった(そして、その後の「はやぶさ」の引退によって、私は丸一日かけての豪華旅を味わう機会を永遠に失ってしまった)。ちなみにこの予算は翌年度に繰り越され、学生 2 名が社会事業大学を訪問調査し、報告を行ってくれた。

◇得難い人材、時間的ゆとりと熱気

ひとりの学生の存在を忘れることができない。甘木市(現在の朝倉市)出身の田代秀博君である。田代君は、社会学会誕生直後から、学会の活動に熱心に取り組み、実に 8 年の長

きに亘って、運営委員として活躍してくれた。どうして8年間かといえば、本人が身体的な障がいを抱えていたことも要因のひとつではあるが、むしろ、学生生活を積極的に存分に楽しみたいという、彼一流の確信犯的留年であったと、私は見ている。地頭の良い人で、歴史を語らせると彼の右に出るものはいなかった。こうした得難い人材の力もあり、社会学会は学生主体の共同体としても見事に機能していた。

たとえば、「ゆうかり」以外にも、学生が独自に編集した「YAM」(Young Association Magazine, あるいは鹿児島から南西諸島に特産の「ヤム芋」のヤムにちなんで)という機関誌も誕生する。企画を学生たち自身で立ち上げ、取材し、原稿をものにし、校正・編集まで担当するユニークな雑誌であった。いまから考えると、とても不思議な気がしてならない。学生たちにどうしてそのような熱気と、時間的ゆとりがあったのだろうか？ ワープロさえまだ手許にない時代である。手書き原稿を書き、編集する作業には、大変な苦労があったことだろう。

◇長い車中旅にあるが如く

考えてみれば、1980年代には、移動手段の不便さや長い移動時間の反面で遊びの隙間時間がそこここにある、そうしたニッチな時間帯は、リッチなゆとり時間の源泉となりえた。いわば時間のパラドクスである。

当時の時間感覚は、せいぜい週刊誌的な(あるいは月刊誌的か?)速度であった。現在のそれは、ラインニュースに象徴されるオンデマンドのデジタル時間である。かつて最大で22時間かかっていた東京への列車旅も、いまや6時間少しとなった。約4分の1に縮まったのである。では、私たちに「時間的ゆとり」が生まれたかといえば、むしろその逆である。短縮されたことで生まれる時間は、仕事へと振り向けられ、ストレスや負担は増加するばかりだ。まさに「パーキンソンの法則」である。

やる気や熱気の点でいえば、「鹿児」島にも近い陸の孤島的な地理感覚(当時は九州高速道も未貫通)が、学生たちにある種の一体感を醸し出していたように思えてならない。県外出身の学生の割合が随分高かったこともあり、下宿生も数多くいた。日本の端っこから何かを変革しよう(たとえば、社会や福祉のかたちを)というパイオニア的連帯感が熱かった。また、資格社会のオブセッション(資格取得至上主義)もまだ希薄であったため、社会福祉学科と産業社会学科の両学科は、「社会学」の旗の下で連帯していた。

丸一日かけての列車旅では、車窓風景にときどき目をやりながら、物思いや読書に耽ったり、人生のあれこれを想起・回顧するものである。当時のわれわれは(教員も学生も)、皆、こうした長い旅時間のなかにいたように感じられる。それはきっと、見事なまでに贅沢で豊かな時間旅だったことだろう。



鹿児島国際大学社会福祉学会会則

【総 則】

第1条 本会は、鹿児島国際大学社会福祉学会と称し、本会の事務所を鹿児島国際大学福祉社会学部社会福祉学科に置く。

第2条 本会は、学術研究を推進し、会員相互の学問的交流を促進するとともに、地域社会の文化的発展に寄与することを目的とする。

第3条 本会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。
(ア) 会報ならびに機関紙の編集・発行
(イ) 研究会・講演会等の開催
(ウ) その他、本会の目的を達成するために必要と認められる事業

【組 織】

第4条 1. 本会は、福祉社会学部社会福祉学科並びに大学院福祉社会学研究科に在籍する学生および両科の専任教員をもって会員とする。
2. 準会員については、別に定める。

第5条 1. 本会に次の機関を置く。
(1) 会長
(2) 総会
(3) 運営委員会
(4) 監査委員
2. 会長は、社会福祉学科長とする。
3. 運営委員(教員4名、学生8名以上)および監査委員(教員2名、学生2名)は、社会福祉学科で選出し、総会の承認を得るものとする。
4. 前項の各位委員の任期は、教員については2年、学生委員については1年とする。
ただし、再任は妨げないものとする。

【機 関】

第6条 1. 会長は、本会を代表する。
2. 会長は、年1回の定期総会を招集しなければならない。
3. 会長は、運営委員会の議決に基づいて臨時総会を招集することができる。

第7条 総会は、本会の最高議決機関である。

第8条 1. 運営委員会は、総会の承認により、学会の運営にあたる。
2. 運営委員会は、委員長(教員)と副委員長(学生)の各1名を互選する。
(1) 運営委員長は、運営委員会を代表し、定期および臨時に運営委員会を招集する。
(2) 運営委員会は、そのもとに必要に応じて委員会を置くことができる。
3. 運営委員会は、教員委員および学生委員のそれぞれ過半数の出席によって成立する。

4. 運営委員会は、次の事項を審議決定しなければならない。
- (1) 年間事業計画
 - (2) 予算案および決算書
 - (3) 会則の改正ならびに諸規定承認・改廃
 - (4) その他必要な事項
5. 運営委員会の議決は、出席した教員委員および学生委員のそれぞれの過半数の賛成で決する。

[財 政]

第9条 教員会員の会費は、年額2,500円とし、年度初めに納入する。学生会員の会費は、年額2,500円とし、入学時に一括納入する。

第10条 1. 本会の経費は、会費・補助金・寄付金でまかなう。
2. 会計年度は、4月1日から翌年3月31日までとする。

第11条 会費の徴収、保管および支払いについては、大学事務局に委任するものとする。

第12条 運営委員会は、毎年会計年度終了後2ヶ月以内に決算を行い、監査委員の監査を受けたいで総会に報告し、その承認を得なければならない。

[改廃手続]

第13条 本会則の改廃は、運営委員が発議し、総会の決議を経なければならない。

附則

- 1. この会則は、昭和57年4月1日から施行する。
- 2. この会則は、平成13年7月27日に改正し、施行する。
- 3. この会則は、平成15年7月4日に改正し、施行する。
- 4. この会則は、平成18年4月1日に改正し、施行する。
- 5. この会則は、平成20年4月1日に改正し、施行する。

2021（令和3年）年度 鹿児島国際大学 社会福祉学会 収支決算報告

摘 要			金 額	予 算
前年度繰越金			2,346,308	2,346,308
収 入	会 費	1,017,500	1,017,529	925,000
	参加費	0		
	雑収入	29		
	寄付金	0		
収 入 計		1,017,529	3,363,837	3,271,308
支 出	『演習論文要旨集』発行費	0	487,492	0
	会議費	0		10,000
	自主研究助成費	15,272		150,000
	新入生歓迎行事費	0		0
	卒業パーティー開催費	0		0
	『ゆうかり』発行費	462,000		462,000
	講演会開催費	0		150,000
	事務費	0		10,000
	通信費	220		10,000
	特別事業費	0		0
	学生アルバイト料	0		0
	会 費	10,000		
支 出 計		487,492		842,000
当年度末残高			2,876,345	

ゆうかり編集室便り

2022 年の『ゆうかり編集』をとおして

- ◇ 今回は社会福祉学科の創立 40 周年ということで、過去の『ゆうかり』を沢山読んで感想を書くという作業を行いました。大変でしたが、編集委員のみんなと親交を深めることもでき、良い経験となりました。
(重村 美帆)
- ◇ 今回は、「ゆうかり」を読んだ感想文を書くという作業でした。大変でしたが他学年の方と関わることもでき、大変良い経験をすることができました。(川崎 千尋)
- ◇ ゆうかりの作成や普段関わることのない他学年との交流などコロナ禍であったため出来ないことも多かったが多くの経験をすることができました。(摺木 太一)
- ◇ 過去のゆうかりを読んでみていろんなことを知ることができて今まで見たことのないことをたくさん知ることができてとても良い経験になってよかったなと思いました。いい勉強になりました。
(磯村 勇太)
- ◇ ゆうかりの活動をとおして、新型コロナウイルス拡大が軽減されるなかで、みんなが時間を合わせて一緒に活動できたことは、とても良い思い出の一つになりました。先生が、私たちのためにお菓子や柿を持ってきてくれたことも忘れません！(岩下 美輝)
- ◇ 分からないことだらけでいろんな人のサポートがあつて、いろんな人の交流があつて楽しかったです。
(西川路 優斗)
- ◇ 今回の仕事がなければ、ゆうかりを読む機会は無かったと思いました。過去のゆうかりを読み感想を書くという仕事をした中でゆうかりには、参考になることが沢山書かれていることを知り、将来の自分に役立つアイテムであると思いました。(森下 竜成)



ゆうかり第 22 号編集を担当したゆうかり委員 8 名の学生に心より感謝いたします。

(ゆうかり編集担当 上田雪子 山下利恵子)

編集後記



挨拶

2022年度、社会福祉学科学会副会長を担当させていただいた社会福祉学科3年の金倉愛果です。今年度は社会福祉学科が1982年に創設されて40年という節目の年となりました。これまで、世の中の福祉の力になる若者の育成に携わってくださった地域の皆様、教職員の皆様、そして卒業されたご先輩方に敬意を表する次第であります。今回のゆうかり第22号ではゆうかり編集委員会の方々が社会福祉学科創設40年を記念しての特集記事や40年を振り返って先生方からのメッセージを掲載されています。現在ユウカリ会館となっているところが図書館であったり7号館のところには大きな食堂があったりと40年間の歴史や変化を感じられる内容となっております。ぜひ目を通してみてください。

40年の時を経て社会は大きな変化を遂げました。三種の神器をはじめとする電化製品やインターネットの普及が広まり多くの人は暮らしやすくなったのではないのでしょうか。その分急速な変化に伴い、新たなニーズや解決すべき課題も増えたのではないかと感じています。国内だけではなく世界に目を向けてみると、貧富の格差や国同士や考え方からの争いから日々砲弾が飛び交う地域もあり、決して平和とは言えない日々が続いています。一刻も早く世界中の人々の人権が保障される平和と安全な日々、安定した衣食住がある生活が送れるような世の中になることを望んでいます。

2022年度は全世界を通して、決して幸せになれるようなニュースだけではありませんでした。しかし、考え方を変えてみると、この状況を私たちが微力ながらも福祉の力で変えていける可能性は大いにあると思います。私たちのやるべきことをできる範囲で行い、すべての人が暮らしやすい世の中になるようなれば良いと感じております。そして、今後ますます福祉が必要とされる社会を私達学生が担っていかすように日々精進して参ります。

2022年度の社会福祉学会には、多くの運営委員の皆様が参加してくださいました。ありがとうございました。

皆様への感謝の気持ちと益々のご発展を願い最後の挨拶とさせていただきます。

2022(令和4)年度 鹿児島国際大学社会福祉学会 運営委員

教員運営委員 茶屋道 拓哉(運営委員長) 上田 雪子 古賀 政文 山下 利恵子

学生運営委員

1年: 松下 創思 那須 隆太郎 光 真聖 東 裕太 松菌 綾 米田 美咲 中島 璃咲
揚野 寧々 折尾 文香 新城 利音 山口 光羽 池田 蘭夜 西川路 優斗 重村 美帆
川崎 千尋 鈴木 一誠 宮路 浩志 磯村 勇太 岩下 美輝 古川 吏玖

3年: 吉屋 栄人 稲光 沙羅 内山 琉希 榊 彩人 金倉 愛果 上村 麗奈 横山 千尋
横山 くらら 摺木 太一 森下 竜成 鮫島 未来 永友 詩栞 橋口 和奈 濱村 和璃

会計監査委員 (教員) 有村 玲香 永富 大輔 (学生) 池ノ上 友里寧 下津 美月

(順不同)

鹿児島国際大学社会福祉学会誌

ゆうかり 第22号

発行 2023年3月20日

編集 鹿児島国際大学社会福祉学会

住所 〒891-0197 鹿児島市坂之上8-34-1
Tel 099(261)3211(代)

印刷・製本 有限会社 広和印刷
Tel 099(222)3522



本誌ロゴ、ポポラスイラストに関しては、村上絢音さん、村上瑤子さんからのご協力をいただきました。
本当にありがとうございました。



ゆうかり創刊号裏表紙に掲載されていた当時の写真（平成14年）

